

2019-2020年度

横浜市 芸術創造特別支援事業 リーディング・プログラム

YokohamArtLife ヨコハマートライフ報告書



別冊

目次

冒頭文

1 章：共通指標の概要

2 章：共通指標からみる公募時の仮説の検証

2-1 参加者の属性

2-2 公募時の仮説の検証

3 章：国立大学法人東京大学（岡田猛研究室）

受託研究「芸術文化活動のための新たな評価軸の構築」報告書

4 章：個別指標について

5 章：制度としての評価を振り返る（アーツマネジメント・アセスメントについての検討）

別添参考資料 1：個別指標 各 YAL 参加団体報告書

別添参考資料 2：関係者会議（YAL ルーム） 講義録

文責：1 章、3 章～5 章：公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 広報・ACY グループ

2 章：国立大学法人東京大学（研究担当者 東京大学大学院教育学研究科教授 岡田猛）

横浜市 芸術創造特別支援事業リーディング・プログラム YokohamArtLife ヨコハマーライフ報告書 別冊について

「横浜市 芸術創造特別支援事業リーディング・プログラム YokohamArtLife ヨコハマーライフ報告書」（今年度報告書）は、2019 年度～ 2020 年度にかけて実施された横浜市の芸術創造特別支援事業リーディング・プログラム “YokohamArtLife（以下 YAL）” の成果をまとめた報告書である。今年度報告書では、第 1 部では「YokohamArtLife の風景」と題し、芸術を通して横浜の各地で生まれた新たな風景を紹介、また第 2 部では「YokohamArtLife の挑戦」と題し、このプログラムの推進力となった「事業改善のためのコミュニケーションツールとしての評価」について解説している。

本誌「報告書別冊」（以下、本報告書）では、YAL が目指した「芸術文化をもっと身近に、もっと気軽に」の実現に向け、その準備、過程、結果の段階において、どのような調査、評価、報告を行ったかの詳細を記載した。

1 章～ 3 章では、YAL の調査の核となった共通指標（共通アンケート）について説明。これは、YAL をはじめる前に、まず評価を確立するためには、中長期的に蓄積可能な指標づくりが重要ということで準備した。各活動のアーツマネジメントにおける改善と施策が循環する仕組み “評価のサイクル” を意識して作成しました。評価のサイクルは、本仕組みの目標である「芸術文化をもっと身近に、もっと気軽に」から逆算して設計しており、いくつかの仮説に対する検証のための指標づくりとなっている。これは 2019 年度と 2020 年度で共通で項目立てしたものと、2020 年度新規で項目立てしたものがあり、1 章で双方の調査項目の説明、第 2 章で前者、3 章で後者の検証を掲載した。

4 章では、前述の共通指標とは別に YAL 参加団体が独自に設定した個別指標（プロジェクトごとに定めた評価の視点）について、意義や作成の流れを記載した。参加団体が作成した個別指標報告書については、それぞれの知財として本報告書には掲載せずにさらに別紙として掲載する。

5 章では、YAL の評価を振り返り、そこから見えてきた、さらなる評価の進化に向けた仮説を掲載している。

なお、本報告書内で使用する、「今年度報告書」と「昨年度報告書」については、以下をご参照ください。

今年度報告書

2020年度横浜市芸術創造特別支援事業リーディング・プログラム YokohamArtLife ヨコハマーライフ 報告書
<https://acy.yafjp.org/wp/wp-content/uploads/20192020YAL-report.pdf>

昨年度報告書

ヨコハマーライフ・芸術創造特別支援事業 報告書
<https://acy.yafjp.org/wp/wp-content/uploads/2019YokohAmartLife-report.pdf>

別添参考資料 1：個別指標 各 YAL 参加団体報告書

■ 株式会社スタジオ・ゲンクマガイ (STGK Inc.)

報告書：https://acy.yafjp.org/wp/wp-content/uploads/stgk_1.pdf

Youtube：<https://www.youtube.com/watch?v=QiUhbcz4oiM&feature=youtu.be>

■ NPO 法人ザ・ダークルーム・インターナショナル

報告書：<http://52.69.188.227/wp-content/uploads/The-Darkroom-International-report.pdf>

Youtube：<https://acy.yafjp.org/wp/wp-content/uploads/darkroominternational.pdf>

■ YOKOHAMA AIR ACT 実行委員会

報告書：<https://acy.yafjp.org/wp/wp-content/uploads/yokohamaairact.pdf>

■ NPO 法人ヒューマンフェロシップ

報告書：<https://acy.yafjp.org/wp/wp-content/uploads/humanfellowship.pdf>

■ 横浜メディアアド

報告書：<https://acy.yafjp.org/wp/wp-content/uploads/yokohamamediaad-resize.pdf>

別添参考資料 2：関係者会議 (YAL ルーム) 講義録

第 1 回 YAL ルーム講義録：<https://acy.yafjp.org/wp/wp-content/uploads/YALroom1-summary.pdf>

第 2 回 YAL ルーム講義録：<https://acy.yafjp.org/wp/wp-content/uploads/YALroom2-summary.pdf>

1章 共通指標の概要

1-1 2019年度の共通指標

「芸術文化をもっと身近に、もっと気軽に」の実現に向けて、「日頃の芸術文化活動への参加頻度」「YAL の活動に参加した結果として、さらに芸術文化体験をしたくなったのか」などを指標として立てた。

上記、質問項目を含む質問紙を作成し、YAL 参加団体が実施する公演や展示、ワークショップの参加者に向けて共通指標を掲げたアンケートを実施した。

2019年度作成 共通指標の質問項目

【1】 あなたの年齢を教えてください。 1, 6 歳未満 2, 6 ～ 12 歳 3, 13 ～ 19 歳 4, 20 歳代 5, 30 歳代 6, 40 歳代 7, 50 歳代 8, 60 歳代 9, 70 歳代 10, 80 歳以上
【2】 あなたのお住いを教えてください。 0, 開催区 1, 横浜市内 2, 横浜市以外の神奈川県 3, 首都圏 4, 1 から 3 以外の国内 5, 海外
【3】 あなたのご職業を教えてください。 1, 会社員 2, 公務員 3, 自営業 4, パート / アルバイト 5, 学生 6, 専業主婦 / 専業主夫 7, 無職 / 求職中 8, その他 ()
【4】 本日は何人で参加されましたか。 1, 1 人 2, 2 人 3, 3 人 4, 4 人以上
【5】 【4】 で 2 人以上を選択された方にお聞きます。本日はどなたと参加されましたか。 1, 友人 2, 家族 3, パートナー 4, その他
【6】 本プログラム開催地には、普段からよく来られますか。 1, 頻繁に来る (週に数回程度) 2, たまに来る (月に数回程度) 3, ほとんど来ない (年に数回程度) 4, 今回初めて来た
【7】 どのような理由でここに来られましたか。 1, よく来る場所だから 2, 本プログラムがあったから 3, たまたま通りすがったから 4, 他の用事があったから 5, その他 ()
【8】 【7】 で、本プログラムをご存知だった方にうかがいます。このイベントについて、どこで情報を知りましたか。 1, web (ホームページ、SNS 等) 2, タウンニュース 3, 知人の紹介 4, その他
【9】 日頃、身近な地域において、音楽・演劇・美術などの芸術文化を鑑賞したり参加したりする機会・場が充実していると思いますか。 1, そう思う 2, 少しそう思う 3, どちらともいえない 4, あまりそう思わない 5, そう思わない
【10】 日頃、どのくらいの頻度で音楽・演劇・美術などの芸術文化を鑑賞したり参加したりしますか。 1, 今回が初めて 2, 年に 1 回程度 3, 年に 1 ～ 2 回程度 4, 年に 3 ～ 5 回程度 5, 年に 6 回以上
【11】 【9】 と 【10】 でそのように選んだ理由を教えてください。
【12】 本プログラムに参加し、今後音楽・演劇・美術などの芸術文化の鑑賞・参加を始めたい、もしくは増やしたいと思いましたか。 1, そう思う 2, 少しそう思う 3, どちらともいえない 4, あまりそう思わない 5, そう思わない

【13】本プログラムに満足していただきましたでしょうか。 1, 満足した 2, まあ満足した 3, どちらともいえない 4, あまり満足していない 5, 満足していない
【14】本プログラムへの参加は、新しく出会う人との新たな交流の機会になりましたか。 1, そう思う 2, 少しそう思う 3, どちらともいえない 4, あまりそう思わない 5, そう思わない
【15】具体的にどのような点が気になりましたか。自由に感想をお書きください（良かった・悪かった等）。

指標策定：YokohamArtLife 事務局（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団）

指標策定パートナー：ケイスリー株式会社

調査実施パートナー：YAL 参加団体

1-2 2020年度の共通指標

前年度の指標は施策側（制度側）の目的達成のみを聞くものであり、芸術以外でも代替可能な設問の作り方であったため、新たに芸術ならではの評価として芸術に触れたことによる変化や反応を調査した。

東京大学大学院教育学研究科の岡田猛研究室（専門：認知科学、認知心理学）に研究委託をし、心理尺度を活用した質問を2020年度作成のアンケートに加えた。

自尊感情尺度 / 主観的幸福感尺度 / 外部や他者による触発の尺度から、数項目ずつ抽出し、芸術文化活動の意義を評価できるような指標を作成。その質問項目と2019年度事務局作成が作成した共通指標の質問項目（参加者属性）に併せて「共通アンケート」として質問紙を作成し、各団体の開催日程に合わせて適宜実施した。

2020年度作成 共通指標の質問項目

岡田猛研究室作成 共通アンケート

質問1 （全くあてはまらない～とてもあてはまるの7件法）

1. インスピレーションを感じた
2. わくわくした
3. 新しいイメージやアイデアが湧いた
4. 自分も何か表現したくなった
5. 実際に何かしてみたくなった

質問2 （全くそう思わない～とてもそう思うの5件法）

1. もっといろんな表現や作品を見てみたいと思った。
2. 自分で作品を作ったり、表現したりしてみたいと思った。
3. 芸術文化に関わる活動にもっと参加したいと思った。

4. 美術館や図書館、劇場に行きたくなった。
5. 自分の得意なところを見つけた。
6. 自分に対して、前向きな気持ちになれた。
7. 私はいろんなことが出来ると思えた。
8. 自分の良いところを見つけることができた。
9. 自分の存在が認められていると感じた。
10. 自分らしく振舞うことができた。
11. ありのままの自分を出すことができた。
12. 人の輪の中に入ることができた。
13. 周りの人と関わりをもつことができた。
14. 自分が社会の一員だと感じる事ができた。
15. 自分の住む地域に興味を湧いた。
16. 自分の住む地域とのつながりを感じた。
17. 自分の住む地域に誇りや愛着を感じた。
18. 魅力的な地域づくりのために自分から積極的に活動したいと思えた。
19. 地域の人々と何かをすることで自分の生活が豊かになると思えた。

2020年度事務局 共通指標項目（継続）

※＊印は 2019 年度と同一項目。

ただし、2019 年度共通指標のうち、12,13,14 は、岡田猛研究室の質問と同内容のため岡田猛研究室の質問項目で実施し、適宜活用した。

* 【1】（年齢）あなたの年齢を教えてください。				
1, 6 歳未満	2, 6 ～ 12 歳	3, 13 ～ 19 歳	4, 20 歳代	5, 30 歳代
6, 40 歳代	7, 50 歳代	8, 60 歳代	9, 70 歳代	10, 80 歳以上
【1】（性別）あなたの性別を教えてください。				
1. 男性	2. 女性	3. その他		
* 【2】あなたのお住まいを教えてください。				
0, 開催区	1, 横浜市内	2, 横浜市以外の神奈川県	3, 首都圏	4, 1 から 3 以外の国内
			5, 海外	

* 【3】あなたのご職業を教えてください。 1, 会社員 2, 公務員 3, 自営業 4, パート / アルバイト 5, 学生 6, 専業主婦 / 専業主夫 7, 無職 / 求職中 8, その他
* 【4】本日は何人で参加されましたか。 1, 1人 2, 2人 3, 3人 4, 4人以上
* 【5】【4】で2人以上を選択された方にお聞きます。本日はどなたと参加されましたか。 1, 友人 2, 家族 3, パートナー 4, その他
* 【6】本プログラム開催地には、普段からよく来られますか。 1, 頻繁に来る（週に数回程度） 2, たまに来る（月に数回程度） 3, ほとんど来ない（年に数回程度） 4, 今回初めて来た
* 【7】どのような理由でここに来られましたか。 1, よく来る場所だから 2, 本プログラムがあったから 3, たまたま通りすがったから 4, 他の用事があったから 5, その他
* 【8】【7】で、本プログラムをご存知だった方にうかがいます。このイベントについて、どこで情報を知りましたか。 1, web（ホームページ、SNS等） 2, タウンニュース 3, 知人の紹介 4, その他
* 【9】日頃、身近な地域において、音楽・演劇・美術などの芸術文化を鑑賞したり参加したりする機会・場が充実していると思いますか。 1, そう思う 2, 少しそう思う 3, どちらともいえない 4, あまりそう思わない 5, そう思わない
* 【10】日頃、どのくらいの頻度で音楽・演劇・美術などの芸術文化を鑑賞したり参加したりしますか。 1, 今回が初めて 2, 年に1回程度 3, 年に1～2回程度 4, 年に3～5回程度 5, 年に6回以上

指標策定 : 2019年度継続項目 YokohamArtLife 事務局（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団）

2020年度新規項目 [岡田猛研究室*]

データ分析: 2019年度継続項目 YokohamArtLife 事務局（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団）

2020年度新規項目 [岡田猛研究室*]

調査実施パートナー: YAL 参加団体

〈* 東京大学大学院教育学研究科 岡田猛研究室〉

研究責任者: 岡田猛（東京大学大学院教育学研究科教授）

調査担当者: 縣拓充（東北大学高度教養教育・学生支援機構高等教育開発部門高等教育開発室助教）

調査担当者: 石黒千晶（金沢工業大学情報フロンティア学部心理科学学科助教）

調査担当者: 松本一樹（東京大学大学院教育学研究科博士課程）

1-3 2020年度調査実施スケジュール

	スケジュール	調査人員 / 方法	回収枚数
STGK Inc. 散歩フェスティバル	2020/11/3 (今年度報告書 p.9 参照)	外部調査員 8名 YAL 事務局 2名 ・配布 / 回収	177 部※1
STGK Inc. 左近山アトリエ 131110	2020/10月～2021/2月末 (今年度報告書 p.9 参照)	アトリエスタッフ ・配布 / 回収	27 部

	スケジュール	調査人員 / 方法	回収枚数
NPO 法人ザ・ダークルーム・インターナショナル PHOTO CABIN 2020	2020/11/21,22,29 12/6,12,19,20 (今年度報告書 p.11 参照)	参加団体スタッフ ・配布 / 回収 ・オンラインフォーム	61 部
YOKOHAMA AIR ACT 実行委員会	2021/1/16 ~ 1/31 (今年度報告書 p.13 参照)	参加団体スタッフ ・オンラインフォーム	76 部
NPO 法人ヒューマンフェローシップ 参加者レッスン	2020/9 月 ~ 12 月 (今年度報告書 p.15 参照)	参加団体スタッフ ・オンラインフォーム	
NPO 法人ヒューマンフェローシップ M6 Musical ACT 発表会	2020/12/19 (今年度報告書 p.15 参照)	参加団体スタッフ YAL 事務局 2 名 ・配布 / 回収 ・オンラインフォーム	97 部
(株) 横浜メディアアド テアトル図書館へようこそ!	2020/12/5,18,25 2021/1/24,30,31 2021/2/11,14,27 (今年度報告書 p.17 参照)	参加団体スタッフ 7 ・配布 / 回収	116 部

※ 1 総回収部数は 177 部であったが、岡田猛研究室の研究における有効回答数は 139 部であった。

* 2019 年度の調査実施スケジュールは、各参加団体のプロジェクト開催日に併せて行った。プロジェクトの開催日は、昨年度報告書参照。

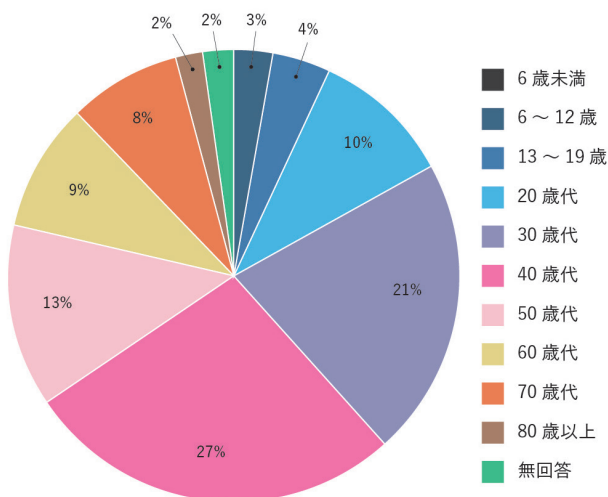
2章 共通指標から見る公募時の仮説の検証

この章では、共通指標を基に作成した「共通アンケート」の調査結果から、YAL 公募実施前に立てた仮説の検証を行う。
YAL 参加団体のプログラム実施にあわせて行ったアンケートによって、全 564 件の回答が得られた。

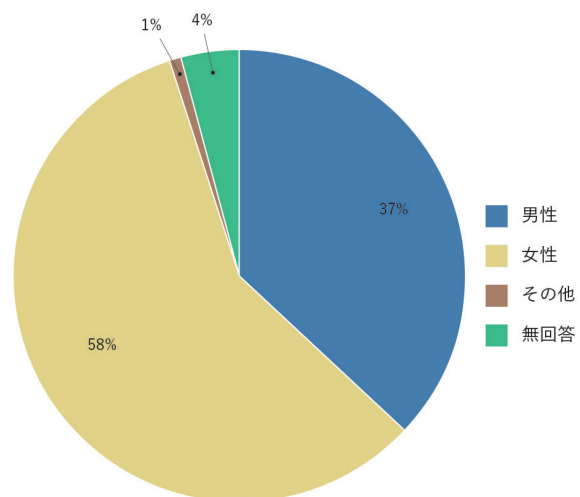
2-1 「共通アンケート」結果から見る参加者の属性

年齢、性別、居住地域、来場理由のデモグラフィックなデータについて、全アンケートの集計結果を掲載する。
N = 564 とし、それぞれの質問における無回答に関しては各項目に付記する。

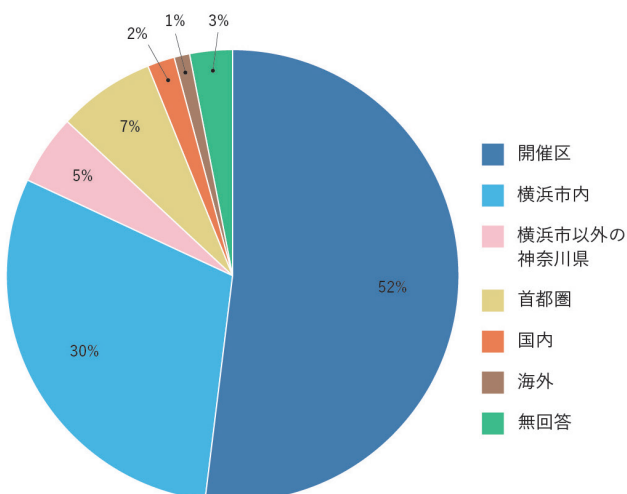
年齢（無回答 = 14）



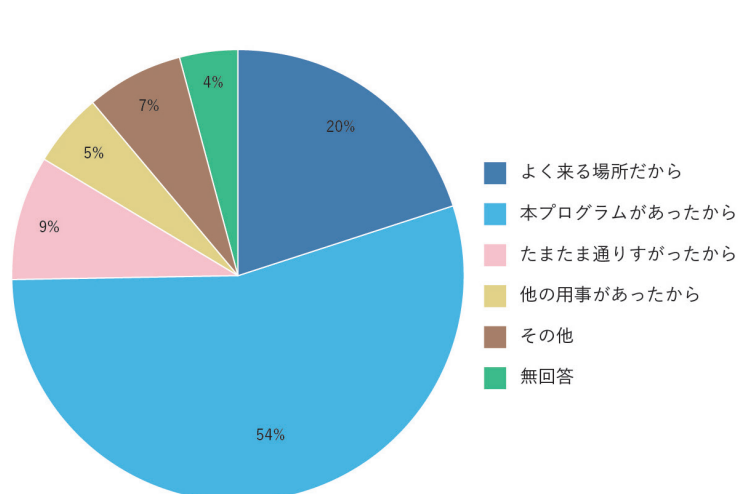
性別（無回答 = 21）



住まい（無回答 = 16）



来場理由（複数回答）



2-2 公募時の仮説の検証

ここでは、2019 年度時の公募前に行った仮説の詳細および、2020 年度の共通指標による「共通アンケート」の調査結果から見る「地域ランドマーク」開催の効果について検証する。

「芸術文化をもっと身近に、もっと気軽に」を目標している当制度は、公募時に芸術活動を実施する場の設定が重要であると仮説した。具体的には、「地域ランドマーク*」で実施することにより、芸術体験への参加度と次なる参加意欲は高まると考え、申請内容を誘導した。

「普段、芸術文化活動に触れる機会の少ない人」のうち、YAL の活動を通して「今後芸術文化に関わる活動に積極的に参加したい」と変化した割合については、今年度報告書の P19「数字で見る YokohamArtLife の振り返り」に記載している。

今年度は、新型コロナウイルスの影響によって「地域」「身近」が顕在化したこともあり、開催区からの参加者がたまたま通りすがりに参加したというケースが多く見受けられた。そこで、「たまたま通りすがったから」と回答した参加者を対象に、岡田猛研究室作成の共通アンケートから「芸術活動へのモチベーションの項目」（質問 2 3、4）について検討してみることにした。（第 3 章参照）

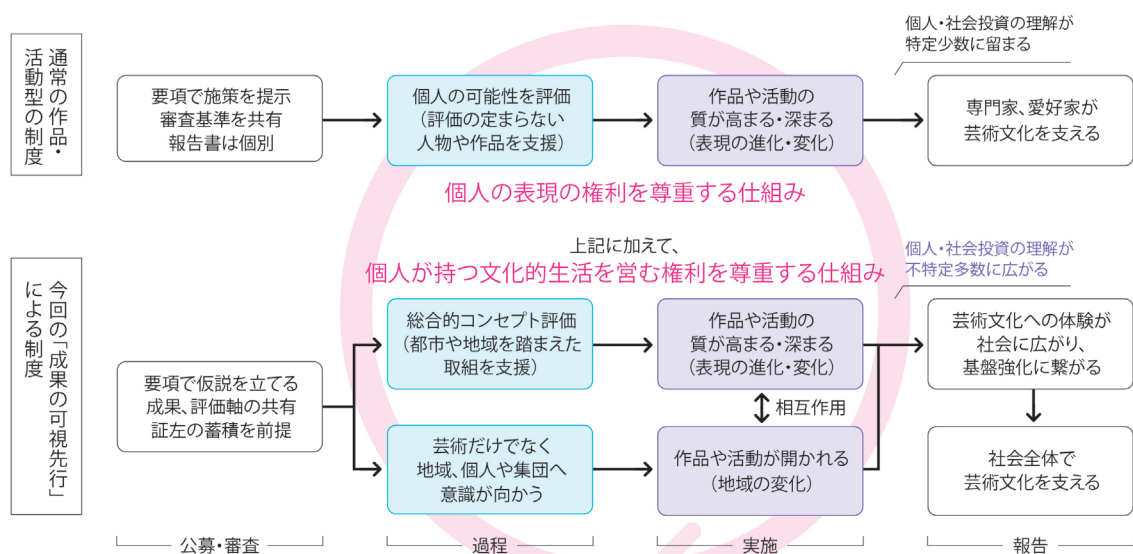
* 地域ランドマーク…地域の人が愛着を持ち、誇りに感じ、多様性を包摂する場のこと。具体的には、屋外公共空間、屋内公共施設、商店街、歴史的建造物など。

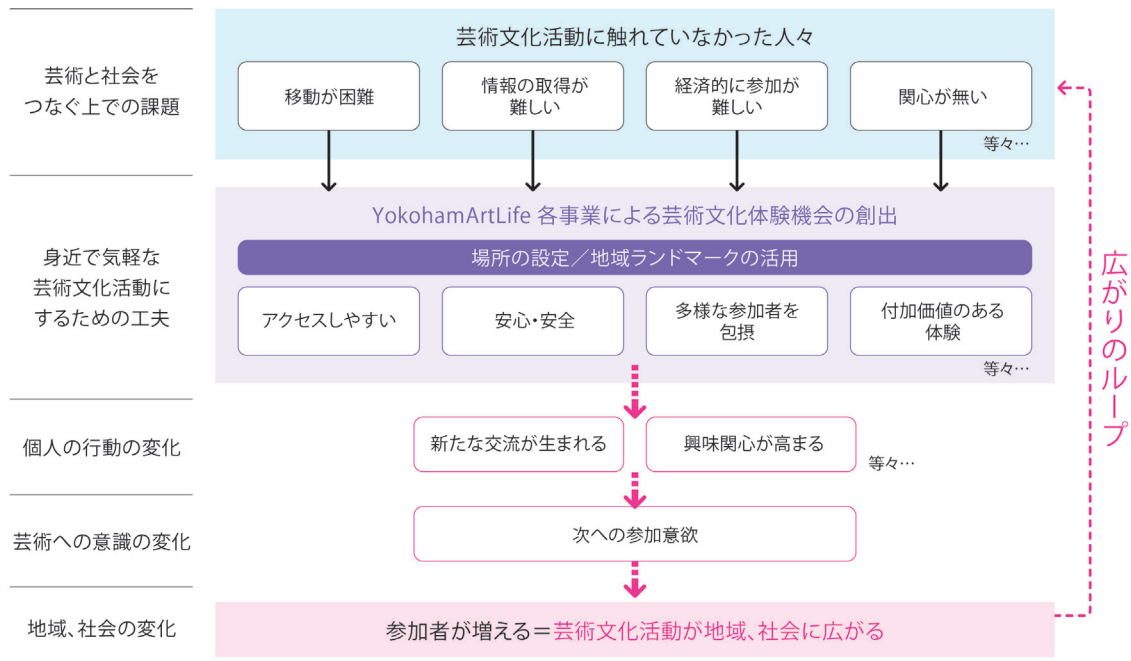
(1) 公募前の仮説

まずは、今年度報告書では説明しきれなかった、YAL の特徴を昨年度報告書 P7-9 より引用し、初年度公募時の仮説と地域ランドマークに関する図版を掲載する。YAL は、文化行政がする芸術文化活動が特定少数の人のためと見られがちであることを踏まえ、芸術活動が不特定多数に広がるよう、施策と活動の評価が循環する仕組みを導入、制度の目的を公募段階から伝えて、申請者に企画の立案に反映してもらうよう準備した。また、そのポイントとして、「地域ランドマーク」という場の設定と活用方法を予め示唆した。

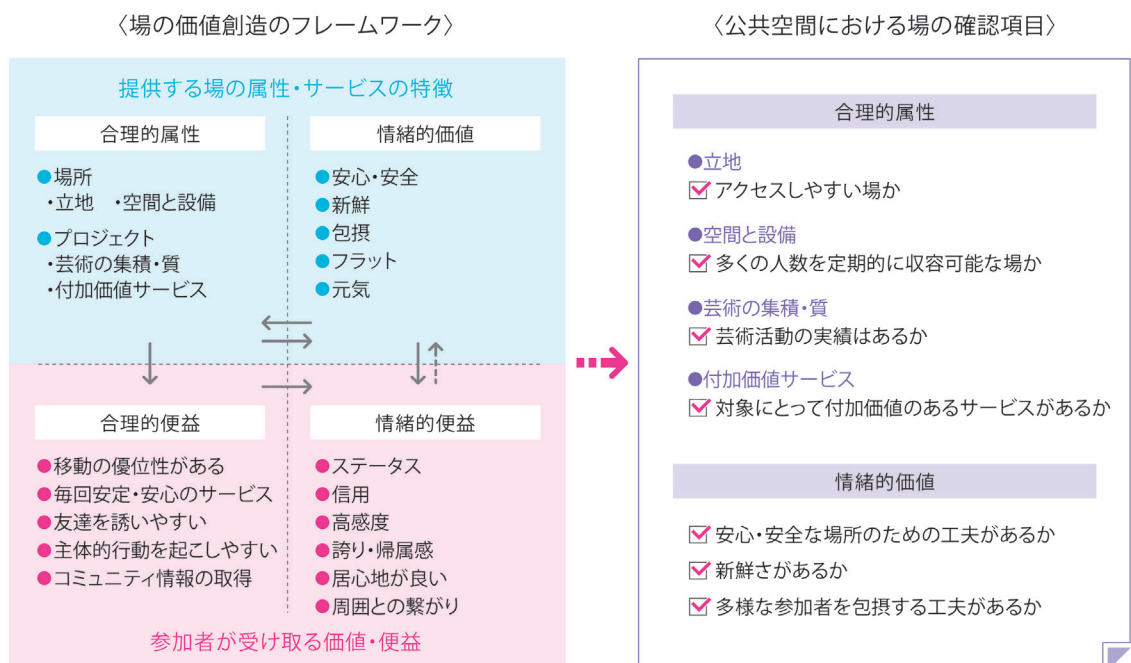
1-1 | YokohamArtLife とは 今回の制度の特徴 ～成果の可視先行、対話をもたらす公共性

・募集側は公募・審査段階で「成果の可視先行」でパートナー（実践者／実施団体）に企画の意図、仮説や指標を詳細に提案。採択後の過程段階で「評価をツールとした対話の重視と証左の積み上げ」を行うことで公共性を高めました。結果、目的や目標が異なるもの同士を包摂し、現場レベルでは臨機応変な対応を可能にし、活動の質と量が向上。このように社会全体で芸術文化活動を支援していく流れをつくります。





©fita (山崎真美)



©fita (山崎真美)

(2) 地域ランドマークで芸術文化活動を行ったことで見えてきたもの

地域ランドマークを設定した効果を表す数値として、アンケートの質問項目回答肢にある偶発的出会いを示す「たまたま通りすがったから」に着目した。そこから得られた数字をもとに、地域ランドマークでの芸術体験について、以下の検討を試みることにした。

〈検討目的〉

芸術文化体験を「もっと身近にもっと気軽に」を実現すべく活用した「地域ランドマーク」。ここで芸術文化プログラムを行ったことで、それに偶発的に触れた人の今後の芸術文化体験への参加意欲や、芸術専門施設への来訪意欲はどのように変化するのか、ということについて検討する。ただし、この試みは、今回は芸術専門施設との比較ができていないため、次の取り組みのためへの一つの種として位置付けられる。

〈検討方法〉

本報告書では、横浜都心部の専門施設を「フォーマルな場」、対して今回の制度で推奨した地域ランドマークを「インフォーマルな場」と定義する。そして、インフォーマルな場における芸術文化体験に、偶発的に出会った人／当該プログラムを目的にきた人の「今後の芸術文化体験への参加意欲」と「芸術専門施設への来訪意欲」をクロスさせ、その回答割合を比較する。

※フォーマルとインフォーマル

学習科学の中で使用される言葉。今回はその定義の中の、その体験が意図的か意図的でないかというところに注目した。そして、意図的に出会う場と意図しないで出会う場に抛る体験の違いを捉えるため、この言葉に「場」を付けて独自に定義し、フォーマルな場、インフォーマルな場として使用することとした。

(参考文献：山内祐平「教育工学とインフォーマル学習」日本教育工学会論文誌 37 (3) ,187 - 195, 2013)

〈対象〉

要素1：事務局質問【6】どのような理由でここに来られましたか。

A群：「3. たまたま通りすがったから」と回答した人

B群：「2. 本プログラムがあったから」と回答した人

要素2：要素1の回答の内、

Q1：「芸術文化に関わる活動にもっと参加したい」

Q2：「美術館や図書館、劇場に行きたくなった」

への回答のうち、「そう思う」「まあまあそう思う」を合わせた割合。

なお、検討対象団体はA群「たまたま通りすがったから」の回答が多かった STGK Inc. と NPO 法人ザ・ダークルーム・インターナショナルとし、その他の参加団体は除外した。

〈仮説〉

A群：たまたま通りすがった人＝意図しないできた人と B群：当該プログラムを目的としてきた人＝意図してきた人との間では、その内容についての意識の在り方や、心の準備が違う。B群は、体験についてある程度の予測や予備知識を持っているが、A群については予備知識や準備がないまま、その体験を純粋に経験することになる。そこで、この2群の間では体験へのアプローチが違うため、体験後の芸術活動へのモチベーション（＊岡田猛研究室 研究1 参照）に差がある。つまり、A群は芸術活動へのモチベーションが低く、B群は高いのではないかと推測した。

〈結果〉

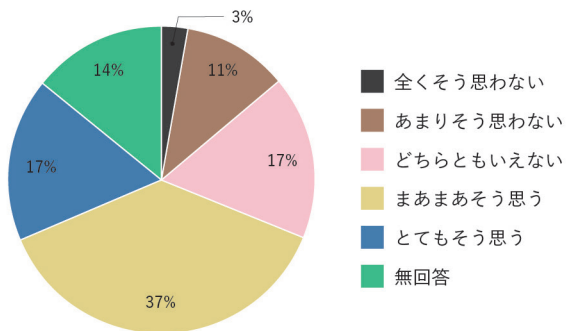
左近山アートフェスティバル！	PHOTO CABIN2020
Q 1:A 群 54% / B 群 79%	Q1 : A 群 81% / B 群 83%
Q 2:A 群 52% / B 群 61%	Q2 : A 群 87% / B 群 72%

いずれの活動においても、A群とB群において、芸術活動へのモチベーションが高い回答（「とてもそう思う」「まあまあそう思う」の回答）が50%を超え、かつ、各プロジェクトにおいて両群の間で大きな差が見られなかった。このため、両群の間で芸術活動モチベーションに差があるのではないかと、という仮説は今回の検討においては当てはまらないことが確認された。

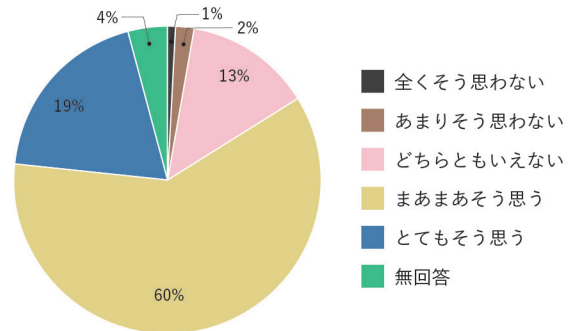
左近山アートフェスティバル！（STGK Inc.）

■ Q1: 芸術文化に関わる活動にもっと参加したいと思った

A 群 たまたま通りすがった人

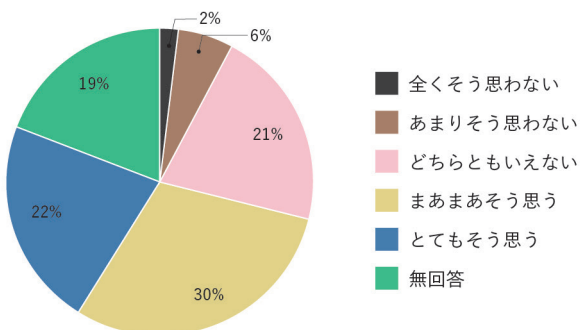


B 群 本プログラムを目的としてきた人



■ Q2: 美術館や図書館、劇場に行きたくなった

A 群 たまたま通りすがった人



B 群 本プログラムを目的としてきた人

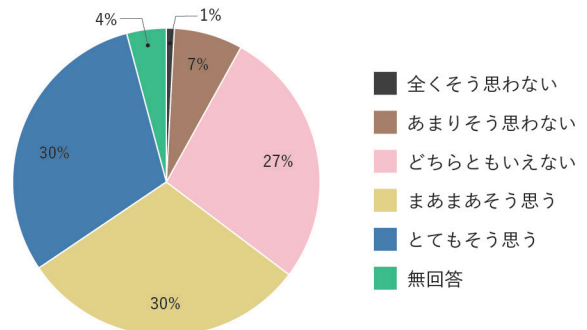
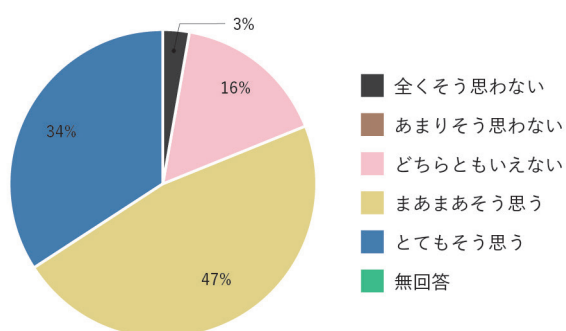


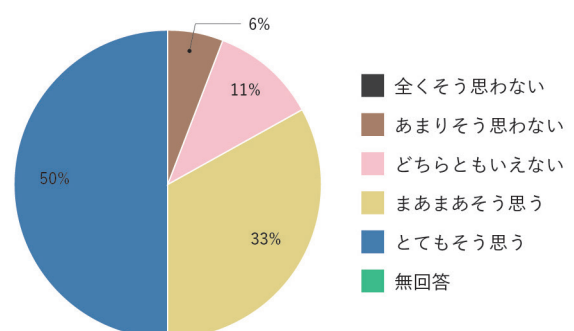
PHOTO CABIN2020（NPO 法人ザ・ダークルーム・インターナショナル）

■ Q1: 芸術文化に関わる活動にもっと参加したいと思った

A 群 たまたま通りすがった人

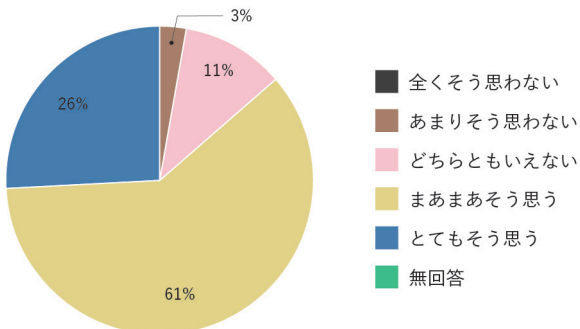


B 群 本プログラムを目的としてきた人

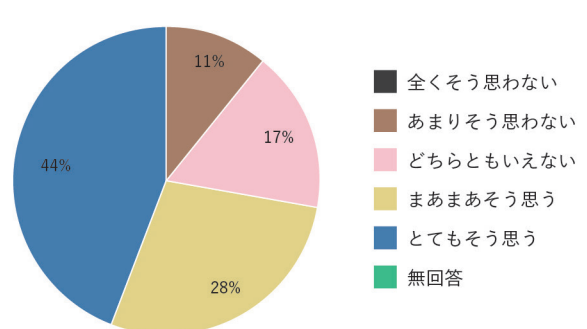


■ Q2: 美術館や図書館、劇場に行きたくなった

A 群 たまたま通りすがった人



B 群 本プログラムを目的としてきた人



〈考察〉

今回の検討の目的は、地域ランドマークで芸術文化活動を行うことは、芸術専門施設での体験とどう異なるのかという次への検討のための種まきとして位置付けている。それを考慮した上で以下のように考察する。

2020 年は、新型コロナウイルスの影響で自分の住む地域に居ざるを得ない状況が多くあった。そんな中、YokohamArtLife の各参加団体が、地域ランドマークを活用した芸術文化体験の機会を創出したことで、偶発的に当該プログラムの体験に出会う人が多くいた。今回の検討において、芸術文化活動との意図した出会いと、意図しない出会いにおける芸術活動モチベーションに差はなかったことから、自分の身近な地域＝地域ランドマークで開催されていたから、偶発的に当該プロジェクトに出会い、純粋にその芸術活動を体験したことによって、芸術活動全体へのモチベーションが上がったという風に解釈することもできるのではないだろうか。

左近山散歩フェスティバル！では、事務局スタッフが、実際に近くに住む高齢の方で偶然このイベントに出会ったという方 3 名にお話を聞くことができた。皆、年を取って遠くの芸術専門施設に行くことができないが、散歩に来てみたらこんな近くでライブペインティングや本物のアーティストに出会うことができ、嬉しかったという感想を言っていた。また、PHOTO CABIN2020 では、アイスクリームを食べに来たら出会えたと回答した家族の芸術活動モチベーションは高くなっていた。

このように、偶発的な出会いにも様々な理由やバックグラウンドがあるが、本制度で取り組んだ、地域ランドマークの活用による、特定地域に根差した活動や面的に横浜市郊外部をカバーする活動は、芸術文化に触れなくても触れることができない人や、芸術文化に触れようと思っていなかった人をも包摂して、芸術文化活動を広げ、次への参加意欲や専門施設来訪意欲につながっていると考えることができるであろう。

今回の調査では、実際にフォーマルな場とインフォーマルな場での芸術文化活動の体験の差を確認することはできなかったが、地域ランドマークで多様な芸術文化活動を展開したことによって、本制度が目指した「芸術文化をもっと身近にもっと気軽に」は、実現可能な目標なのではないかという可能性が見えてきたと言えよう。

3章 国立大学法人東京大学（岡田猛研究室）受託研究 「芸術文化活動のための新たな評価軸の構築」報告書

この章では、2020 年度から共通指標として取り組んだ、標国立大学法人東京大学（岡田猛研究室）受託研究の報告書を転載する。

研究 1：芸術文化事業による参加者の心的変化を測定する心理尺度の開発と それを用いた各芸術実践の意義の確認

概要

近年、芸術文化に関わる教育実践は様々な地域、コミュニティで行われ、その意義が注目されつつある。YokohamArtLife では横浜市の住民を対象に、様々な団体が芸術文化実践を行ってきた。それらの実践の意義をより深く理解するため、2020 年度には 5 つの団体が行った芸術文化事業を通して、参加者の気持ちや考え、態度がどのように変わったかを検討する複数の研究を実施した。まず、芸術文化事業の意義を確認する心理尺度を作成し、その妥当性・信頼性を検討した。次に、その心理尺度を使用して 5 つの団体が実施した芸術文化事業で質問紙調査を実施し、参加者の心的状態を計測した。その結果、事業へ参加した人の心的状態（触発、芸術活動へのモチベーション、共同体感覚、コミュニティ意識）が横浜市民と比較して高かったことが示された。さらに、本研究では 5 つの事業団体のうち、2 団体に着目し、その実践過程を丁寧に観察し質的分析を実施した。これらの分析を総合した結果、2020 年度 YokohamArtLife で実施された事業が参加者のアート活動を支援し、その結果、参加者の生活がクリエイティブで豊かに発展していったことが示唆された。

問題と背景

芸術文化事業では鑑賞や表現などの芸術活動を体験することで、参加者の気持ちが様々な側面で変化する。例えば、面白い芸術作品を鑑賞したりしてワクワクしたり、作家の創作活動を間近で見ることで、アイデアが沸き上がってきたりする。このような心理状態は触発（インスピレーション）と呼ばれる。他にも、芸術文化事業に参加する中で、もっと様々な作品を鑑賞したい、劇場に行ってみたい、自分も作品を作ってみたいといった芸術活動へのモチベーションが沸き上がってくることもある。近年は芸術活動を接点として地域住民がコミュニティを作ったり、共同体意識を高めたりする支援をする試みも多い。

このような芸術文化事業を通して触発・モチベーション・共同体意識といった複雑な心理状態が変化したことはどのように確かめることができるだろうか。心理学や認知科学の分野ではヒトの微妙な心理状態を測定するために、様々な手法を開発してきた。心理尺度はある心理概念を示す文章や項目を示し、それに対する反応の強さを回答させることで、回答者の心理状態を妥当、かつ、信頼できる精度で測定することができる。いわゆるアンケート調査では芸術実践の大まかな満足度しか測定することができないが、心理尺度を使用することで参加者がどのような観点で芸術実践に満足したのかというより詳細な内容を測定することも可能になる。実際、芸術活動に関わる心理状態を測定する尺度も複数開発され、芸術教育や実践の現場で使用されている（e.g., 石黒・岡田, 2017; 宇恵, 2018; 高田・石黒・岡田, 2019）。それらを用いる、あるいは、それらをもとにして新しい心理尺度を開発すれば、芸術文化事業を通して参加者の心理状態がどのように変化したのかを詳細に捉えることが可能になる。そのため、本研究ではまず研究 1 として、2020 年度の YAL で採択された複数の芸術文化事業の目的を踏まえて、芸術文化事業が参加者のどのような心的変化を促すのかを確認できる心理尺度を作成することを目的とした。さらに、研究 1 で作成した心理尺度を取り入れたアンケートを各芸術文化事業で配布し、芸術実践を通して参加者がどのような反応をしたかを検討した。

次いで、研究 2 として、一部の事業を個別にとりあげ質的な分析（面接法・観察法による）を実施した。研究 1 で行うような事前に決めた質問紙による調査では、各事業の実施過程のあらゆる側面について網羅的に検討することは困難である。そのため、研究 1 を補助し、さらに研究 1 で見られた反応の内側に潜在する心理的な過程を理解するため、研究 2 は一部の事業の主催者や参加者に面接したり、活動過程を観察することで彼らの詳細な心的変化を理解することを目的とした。

研究1：芸術文化事業の意義を確認する心理尺度の開発とその心理尺度を利用した芸術文化事業の意義の検討

目的

研究1は2020年度の公募で採択された5団体の芸術文化事業に共通する目的を明らかにし、各事業が目的とする参加者の心的変化を測定する心理尺度を開発することを目的とした。

方法

各団体の事業目的の調査 まず、2020年度の公募で採択された5団体の代表者に本年度のプロジェクトの目的、内容、実施計画等を尋ねるインタビューを実施した。そして、各団体が芸術文化実践を通して参加者のどのような気持ち・考え・行動の変化をねらいとしているかを検討した。面接を踏まえて全ての団体の実践目的をまとめた結果、各団体の実践は(1) 芸術実践を通して触発（インスピレーション）を促進すること、(2) 芸術活動へのモチベーションを促進すること、(3) 自尊感情を高めること、(4) 居場所感を生成すること、(5) 共同体感覚を生成すること、(6) コミュニティ意識を向上させること、という5つの実践目標のいずれかを含むことがわかった。

触発尺度と芸術文化事業の意義を確認する心理尺度項目の作成 芸術や創造性に関する心理学の知見を踏まえて、先述した5つの実践目的を評価する心理尺度（芸術文化事業の意義を確認する心理尺度）を作成した（Table 1）。(1) に関しては、石黒・岡田（2017）の外界からの触発体験尺度を踏まえて「インスピレーションを感じた」「わくわくした」「新しいイメージやアイデアが湧いた」「自分も何か表現したくなった」「実際に何かしてみたくなった」の5項目を作成した。(2) 芸術活動へのモチベーションについては、鑑賞や表現という代表的な芸術活動の他、各芸術文化事業の面接から実践を通して狙う参加者の行動変容の内容を踏まえて芸術文化活動一般についての項目と、美術館や図書館などの文化施設を訪れることを示す項目を追加した。(3) 自尊感情については、櫻井（2000）の自尊感情尺度を参考にして、芸術文化事業を通して促すことができると考えられる項目を追加した。(4) 居場所感については居場所感尺度（石本，2010）の項目を参考に、(5) 共同体感覚については共同体感覚尺度（高坂，2011）の項目を参考に、(6) コミュニティ意識についてはコミュニティ意識尺度（石盛，2013）を参考にしながら、各芸術文化事業の面接の結果や芸術文化事業を通して促すことができると考えられる項目を作成した（Table 1）。

触発尺度と芸術文化事業の意義を確認する心理尺度の妥当性・信頼性の検討 芸術文化事業の意義を確認する心理尺度の妥当性・信頼性を検討するため、20代から60代の一般成人300名（年齢 $M = 45.34$, $SD = 12.09$ 、男性 = 150名、女性 = 150名）を対象とした調査を実施した。この調査は触発尺度と芸術文化事業の意義を確認する心理尺度が横浜市民を対象とした芸術文化事業で利用できるようにすることを目的としていた。そのため、調査会社に委託の上、横浜市民を対象としたオンライン調査を実施した。その際、横浜芸術文化財団で2020年度に実施した芸術文化事業の開催地と非開催地に居住する市民で回答の差を明らかにするため、調査時に回答者が横浜市のどの区に居住しているかについても回答を求めた。その結果を踏まえて回答者をスクリーニングし、開催地の住民150名（年齢 $M = 45.30$, $SD = 12.04$ 、男性 = 75名、女性 = 75名）、非開催地の住民150名（年齢 $M = 45.38$, $SD = 12.18$ 、男性 = 75名、女性 = 75名）からの回答を得た。

回答者は「あなたの日常生活での考えや気持ちについて教えてください」という教示を読んでから、(1) 触発の程度を問う質問5項目に「1: 全くそう思わない」から「7: 強くそう思う」の7件法で回答した。そして、(2) 芸術活動へのモチベーション、(3) 自尊感情、(4) 居場所感、(5) 共同体感覚、(6) コミュニティ意識の19項目については「1: 全くそう思わない」から「5: とてもそう思う」の5件法で回答した。

各事業での触発尺度と芸術文化事業の意義を確認する心理尺度を使用した調査 2020年度 YokohamArtLife で採択された5つの団体の各事業で触発尺度と芸術文化事業の意義を確認する心理尺度を組み込んだ質問紙調査を行った。調査は各団体でそれぞれの事業を実施した後に参加者に配布した。

結果

触発尺度および芸術文化事業の意義を確認する心理尺度の因子構造の検討 触発尺度は石黒・岡田(2017)の5項目からなるため、理論的に1因子構造を想定して、因子分析(主因子法)を行った。固有値の減衰状況は、3.91, 0.39, 0.32…であり、1因子構造が妥当であると考えられた。抽出された5項目はいずれも因子負荷量が高く、累積寄与率は78.2%であった。また、因子の内的整合も十分であった($\alpha = .93$: Table 1)。

次に、(2)芸術活動へのモチベーション、(3)自尊感情、(4)居場所感、(5)共同体感覚、(6)コミュニティ意識の5因子を想定して作成した19項目について主因子法、プロマックス回転で因子分析を行った。固有値の減衰状況は、10.33, 1.75, 1.57, 1.57…であり、平行分析の結果や、解釈可能性を考慮して4因子構造であるとみなした。その上で、再度因子分析を実施したところ、累積寄与率は70.3%であった(Table 2)。因子間相関はほとんどの因子間で.50以上の相関があった。

第1因子は、項目作成時に想定していた4項目にまとめ、「芸術文化に関わる活動にもっと参加したいと思う」「自分で作品を作ったり、表現したりしてみたいと思う」といった項目に高い因子負荷量が表示された。したがって、芸術活動へのモチベーションと命名した。

第2因子は、「自分に対して、前向きな気持ちになる」や「自分の存在が認められていると感じる」など自分自身を肯定的に捉える項目に高い因子負荷量が表示された。したがって、自尊感情と命名した。

第3因子は、「周りの人と関わりをもつことができる」「人の輪の中に入ることができる」「自分が社会の一員だと感じることができる」といった項目から成り、共同体の中で自分の居場所を見出している感覚を示すと考えられる。したがって、共同体感覚と命名した。

第4因子は、「地域の人々と何かをすることで自分の生活が豊かになると思える」「自分の住む地域に興味湧く」といった項目の因子負荷量が高く、自分の所属するコミュニティについて興味や愛着を持っていることを示すと考えられる。したがって、コミュニティ意識と命名した。

以上の全ての因子で十分な内的整合性が示された($\alpha s > .80$)。以降の分析では芸術文化事業の意義を確認する心理尺度は4因子から成るとみなした。なお、横浜市民の触発尺度および芸術文化事業の意義を確認する心理尺度の因子得点の平均値を算出し、2020年度の横浜芸術文化財団の芸術文化事業が開催された地区の住民と非開催地区の住民とで違いがあるかを検討した。その結果、いずれの因子得点も開催・非開催区住民で有意な差はなかった($ts < 1.31$, $p > .10$; Table 2)。この結果から、開催・非開催地区でも日常生活場面での住民の触発や芸術モチベーション、自尊感情、共同体感覚、コミュニティ意識には違いはないと言える。

各団体のアート実践参加者のアンケート結果 各団体の各事業で触発尺度と芸術文化事業の意義を確認する心理尺度を含むアンケートを配布し、参加者に回答を求めた。そして、参加者の回答を触発尺度、および、芸術文化事業の意義を確認する心理尺度それぞれの因子得点を算出した。

各事業後の目的を踏まえて各事業の実践ごとに参加者アンケートの結果を検討した。Table 3に示すように、各事業実践の目的ごとに対応する因子得点を算出した。そして、横浜市民(N = 300)のアンケートの各実践目標の項目平均値を基準値としたときに、各事業の各実践参加者の因子得点が基準値よりも高かったかどうかを検討し、高かった場合にそのプログラムの意義を示す項目とした。具体的には、触発は3.54, 芸術活動へのモチベーションが2.82, 自尊感情が3.01, 共同体感覚が3.06, コミュニティ意識が2.78を基準値とした。Table 4は各事業・プログラムの目的と意義が確認された項目を示す。なお、NPO法人ヒューマンフェローシップのM6 Musical ACT レッスンについては、参加人数から統計的分析を適用することができなかった。以下、各事業の各実践の結果をそれぞれ述べる。

(1) NPO 法人ヒューマンフェローシップ

参加者が芸術活動の場に居場所を作り、活動する中で自尊感情を高める支援をすることが目的であった。M6 Musical ACT 発表会の観客97名(男性38名、女性54名、無回答5名)へのアンケートの結果、観客の触発の程度、芸術活動へのモチベーション、共同体感覚、コミュニティ意識が横浜市民の平均よりも有意に高かった($ps < .00$, Table 3, Figure 1 参照)。ただし、自尊感情に関しては横浜市民の平均との違いはみられなかった($p > .10$)。

(2) STGK Inc.

左近山団地での左近山アトリエ 131110 左近山アトリエ 131110・および左近山散歩フェスティバル！などの実践をした。これらは住民が芸術活動を通じて、コミュニティに参加し、居場所感や共同体・コミュニティ意識を向上させることを支援することを目的としていた。左近山アトリエ 131110 参加者 15 名（男性 4 名、女性 11 名）のアンケート結果では触発・芸術活動へのモチベーション・共同体感覚・コミュニティ意識、すべての得点が横浜市の市民平均よりも有意に高かったことがわかった ($p < .00$, Table 3, Figure 2ab 参照)。また、左近山散歩フェスティバル！への来訪者 139 名 * 1（男性 54 名、女性 75 名、その他 1 名、無回答 9 名）へのアンケート結果から、来訪者の触発体験、芸術活動へのモチベーション、共同体感覚・コミュニティ意識が横浜市民平均よりも有意に高い数値だったことがわかった ($p < .00$, Table 3, Figure 2ab 参照)。なお、自尊感情は事業の目的には含まれていなかったが、左近山アトリエ 131110 に参加者の自尊感情得点も横浜市の市民平均よりも有意に高かったことがわかった ($p < .00$, Table 3 参照)。

(3) NPO 法人ザ・ダークルーム・インターナショナル

参加者が写真を通じて触発され、芸術活動にコミットする支援をすることを目的としていた。PHOTO CABIN PHOTO CABIN への参加者 71 名（男性 39 名、女性 31 名、無回答 1 名）へのアンケート結果から、参加者の触発・芸術活動へのモチベーション・共同体感覚・コミュニティ意識の得点が横浜市民の平均よりも有意に高い数値だったことがわかった ($p < .00$, Table 3, Figure 3 参照)。

(4) YOKOHAMA AIR ACT 実行委員会

住民とアーティストが芸術活動を通じてコミュニティについて考えたり、創造活動に親しむようになることを支援していた。アート作品の屋外展示の参加者 76 名（男性 36 名、女性 37 名、その他 3 名）のアンケート結果から、触発・芸術活動へのモチベーション、コミュニティ意識が横浜市の市民平均よりも有意に高かったことがわかった ($p < .00$, Table 3, Figure 4 参照)。

(5) ㈱横浜メディアアド

参加者が芸術活動を通じて居場所を作る支援をしていた。「テアトル図書館へようこそ！」は緑区・港南区・戸塚区・中央区・瀬谷区・都筑区・金沢区 7 つの区の参加者 116 名（男性 27 名、女性 86 名、無回答 3 名）へのアンケートの結果、触発・芸術活動へのモチベーション・共同体感覚・コミュニティ意識、すべての得点が横浜市の市民平均よりも有意に高かったことがわかった ($p < .00$, Table 3 参照)。なお、自尊感情は事業の目的には含まれていなかったが、自尊感情の得点も横浜市の市民平均よりも有意に高かったことがわかった ($p < .00$, Table 3, Figure 5 参照)。

考察

本研究では 2020 年度 YokohamArtLife で実施された事業における参加者の心的変化を検討するために、芸術文化事業の意義を確認する心理尺度を開発した。この尺度は横浜市民を対象とした調査で、その妥当性・信頼性が十分されたことから、今後の YokohamArtLife で実施される事業、あるいは、それ以外の芸術文化事業の意義を理解するために役立つ。

実際に芸術文化事業の意義を確認する心理尺度を使用して、本年度の事業の参加者が事業参加後にどのような心的状態であったかを測定した。その結果、2020 年度 YokohamArtLife で実施された事業では、参加者の触発体験や芸術へのモチベーション、共同体感覚・コミュニティ意識が横浜市民よりも高いことが示された。この結果は、各団体の事業が横浜市民のアートライフを豊かにしていたことが示唆している。

ただし、自尊感情に関しては事業のねらいに入っているにも関わらず数値が高くない、あるいは、ねらいに入っていないのに数値が高くなるような例も見られた。このような結果が出た原因としては、調査実施手続きの課題による問題も含めて、いくつかの可能性が考えられる。第一に、自尊感情は事業を通して変化しなかったため、横浜市民平均と違いがみられなかったという可能性が考えられる。しかし、本調査では全ての事業のプロジェクト終了後に参加者の心的状態を測定しているため、事業前後の心的状態がどのように変化したかまではとらえきれていない。例えば、各事業の参加者の自尊感情得点が事業参加前の時点では横浜市民の平均よりも低かったが、事業参加を通して得点が上がって横

浜市民平均に近づいたという可能性である。この場合は、現実には自尊感情の向上があったが、それが事業後のみの測定では確認できなかったことになる。あるいは、その逆、つまり、自尊感情がもともと高いにも関わらず、事業を通して下がり、その結果横浜市民平均に近づいたという場合も考えられる。そもそも自尊感情は短時間・期間で変動する場合も、しない場合もあり、それは個人の自尊感情特性や経験した出来事がポジティブかネガティブかどうかにも依存すると言われている（市村，2012）。事業を通して類似した手続きで芸術体験をしても、参加者個人の特性や経験の受け取り方によっても自尊感情には違いが出やすいかもしれない。このような心理状態の測定においては、出来る限り実践の前後両方で測定をしたりすることが求められるだけでなく、実際の参加者の様子や特性を見極めた上でその数値の変化を考察する必要がある。研究2で後述するように、NPO 法人ヒューマンフェローシップの M6 Musical ACT レッソンの参加者のインタビュー結果を踏まえると、研究1の自尊感情項目に当てはまるような変化は強く出ていなくても、それぞれの参加者の生活や考え方に変化がでていることが見て取れる場合もある。このような参加者の微細な変化を理解する上では心理尺度を用いた調査だけではなく、面接や観察などの手法が有効である。

なお、本年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響や各事業のプロジェクト特性のため、各事業を通して参加者の心的状態がどのように変化したかを何度も測定することはできなかった。もちろん、それでも本年度実施された事業には一定の意義が見いだせるものの、参加者の心的状態が事業を通して変化したのかどうか、その変化の方向性などについては継続的な調査が必要であろう。また、自尊感情などの心的状態に関しては、一斉に質問紙調査をする以外にも、少ない参加者を想定した事業の場合は参加者それぞれに定期的に面接するなど、別のアプローチによる調査も必要であろう。

本年度の調査で全ての事業の参加者の触発や芸術活動のモチベーションが横浜市民平均よりも高かったことから、全ての事業にポジティブな意義を見出せる可能性が示唆された。本年度は、各事業の主催者自身が参加者に調査をすることも試みられたが、今後もそのような試みを重ねることが期待される。そうすることで、主催者自身が事業の意義に自信をもつことができ、より良いプロジェクトの企画・実施が可能になる。また、実施した事業でねらいとは異なる結果が出た場合に、現場で何が起きていたのかを考えるきっかけになるだろう。ただし、調査の内容によっては、調査の計画・実施自体が事業主催者にとって大きな負担になることも想定される。そのため、事業主催者は実践そのものを成功させることに第一の重点を置きながら、調査実施の負担とそこで得られることを考慮して、その都度最適な選択を取る必要がある。事業関係者はそのような主催者の考えを尊重して、事業の実施をサポートすることが求められる。そうした取り組みを長期的に継続することで参加者だけでなく主催者自身のアート実践を豊かにしていくことができる。そして、それが地域での芸術文化事業全体の充実につながるだろう。

（文責：金沢工業大学 石黒千晶）

目的

研究2では、研究1で示唆された芸術文化事業が参加者に対して影響を与える詳細な過程を探索的に検討する。その際、一部事業を個別に分析対象として取り上げ、実施の様子の記録や参加者へのインタビュー（面接）から得られるデータを質的に分析する。なお研究2は、研究2-1（NPO法人ヒューマンフェローシップ「M6 Musical Act」参加者へのインタビュー分析）と研究2-2（NPO法人ザ・ダークルーム・インターナショナル「PHOTO CABIN」ワークショップ実施記録の分析）より構成される。前者は同じ参加者が継続的に関わるプロジェクトの過程に関するものであるのに対し、後者は参加者が基本的に1回のその場限りのワークショップでどのような経験を得ているかを分析する。これらの研究を併せて俯瞰することで短期的・長期的介入の両方に関する知見を得ることができる。

研究2-1：若年者の支援を目指す長期的ミュージカル上演プロジェクトの参加者へのインタビュー調査

方法

研究2-1では、NPO法人ヒューマンフェローシップ「M6 Musical Act」に継続的に参加していた6名の参加者に個別にそれぞれ2回のインタビューを実施した（うち1名はプロジェクト自体に途中から参加しなくなり2回目のインタビューを実施できなかったため、分析より除外した）。インタビューは毎回30分程度、同団体スタッフにより実施された。1回目のインタビューは2020年11月上旬、2回目のインタビューは同年12月下旬から1月上旬に、12月19日のミュージカル上演当日の前後で実施された。インタビューは半構造化面接の形式を採用し、今回のプロジェクトに参加する前後で生じた身の回りの変化などに関する質問項目（「レッスンに参加する前（今年／去年の〇月ごろ）、普段どのように生活していましたか？」「レッスンに参加してから今に至るまで、生活に何か変化はありましたか？小さなことでも構いませんので、思いつくものを挙げてください。」「レッスンの中で楽しいと思ったり印象的だったりする瞬間はどのような時ですか？」など）を準備した上で、会話の流れやインタビュー者の関心に基づいてその場で柔軟に質問内容を修整した。

結果と考察

5名の参加者へのインタビューの結果から、大きく「生活・健康状態の変化」「社会的関係性の変化」「興味・関心の変化」という3種類の側面について、参加者が自覚可能な変化が本プロジェクトによって生じている可能性が示唆された。以下、各側面の変化のプロセスについて該当する発言の引用とともに考察する。なお、以下では各参加者は匿名でA～Eとして表示し、また1回目・2回目のインタビューの発言はそれぞれ①・②として表示する（例：参加者Aのインタビュー1回目の発言であればA①）。

生活・健康状態の変化 5名中3名の参加者が、本人の精神的・身体的な健康状態や生活スタイルのポジティブな変化が本事業への参加と関わる形で生じていたことを述べた。具体例としては、本事業への参加前について、自宅に引きこもり外に出るきっかけを持てない生活が続いており、自分の未来についても「全然、希望が無いというか。このままずっと引きこもり続けて、いつか両親もいなくなったり、それで、自分もまた悲惨な死を迎えるのかな」（A①）というネガティブな印象を抱いていたという発言もあった。本事業参加後については、「少しは前向きな感じになった」（A①）「今までは、新年を迎えたりするときに、なんか、また年度が替わったのに自分は何もしてなかったなっていう感じで、なんか落ち込んだりしてたんですけど、なんか今のところ、そういう感じは全然ないです」（A②）といった発言が見られた。こうした変化について、ミュージカルの上演という「目標」が精神的な安定性と関連しているという意味づけが本人によってなされていた。また、別の参加者からは「前向きになれた」「外出るようになって、いろんな新しい発見とか（できた）」（共にE①）という発言が見られた。特に本事業の主な目的のひとつとして引きこもり傾向のある

若者への支援が含まれることを考えると、ミュージカルの長期的練習、及び、上演というプロジェクトの中で他者と積極的に関わり目標に向かって活動する機会が参加者にポジティブな影響を持っていた可能性は高い。このような変化は事業の目的に沿った変化であったと考えられる。

注意すべき点として、生活・健康状態及びその他の側面の変化に本事業がどのように影響を与えたかについては、ミュージカルに関する要素のみを分離して評価するよりも、本人を取り巻く種々の状況と本事業とが複合的に本人に対してどう働きかけたという視点から考察することが望ましい。インタビューデータの中では、実際に参加者本人が複合的な環境の中で自分の生活・健康状態が改善したことを自覚するような発言が見られた。例えば、「1個でも欠けてたら自分は（良い方向に）出来てなかったんじゃないか」〔E①〕という発言は、外出習慣、自身の健康状態、家族や友人との関係性、ミュージカル活動が複合的に自分の健康状態に影響したことを示唆するものである。この発言に見られるように、参加者が語る自分自身の変化に関する説明の多くは、ミュージカルそのものに関する活動に留まらず、関係者との人間関係や本事業の外部での出来事などとも結びつけて語られるケースが多かった。

より顕在的な変化としては、生活リズムが改善した、散歩習慣が定着した、時間を守るようになったといった事柄が各参加者から報告された。これらの変化と本人の身体・精神的健康状態との関連は多様であり一元的に結論づけるのは難しい。しかし、上述したような多数の要因が複合して個人に影響するという全体構造の中で、本事業が一つの要因として意義を持っていた可能性が示唆される。

社会的関係性の変化 生活を取り巻く様々な事柄の中でも、社会的関係性の変化（家族、友人、その他の周囲の人々と関わり合う際の本人及び相手に関する認知・行動的变化全般）についての発言を分析したところ、5名の参加者のうち4名がそれについて言及していた。一部該当する発言としては、「しゃべることに對する、躊躇というか、そういうのが薄れてきたり、大声を出すのもちょっとはできるように（なった）」（A①）「自分の意見を言えるようになりました」（C①）「ミュージカルやって、やってる途中とかやってる後とかは、割と人の目をそこまで、いい意味で気にせず、堂々とじゃないですけど、自分のことを言えるようには少しはなったのかな」（D②）「自分自身あんまり表に自分を出したりするの苦手だったり、目立つことがしたいのに周りに押されて引いちゃったりとか。〈中略〉（上演後は）ちゃんと自分を出せたのになって自信は付きました」（E②）などといったものが見られた。ここに挙げられた発言例から、本事業は参加者の家族関係や友人関係などの特定の社会的関係に限定的に影響をもたらすというよりは、参加者本人の一般的他者と接する上での姿勢や自己観自体に、周囲とより積極的な相互作用を持つようになるような方向で影響が生じていたことが示唆される。上述した発言の一部でも言及されているように、ミュージカルという演者が観衆に向かって表現をする形式の活動に従事することで、「自分の中にある何かを外に出す」ことへの抵抗が少なくなったり、自分のことを肯定的に捉えて自信を持つようになったりしたと考えられる。その結果、家族、友人、その他周囲の人と関わる際の認知・行動全般に変化が生じた可能性が考えられる。こうした変化を生み出す上で、ミュージカルという活動形式の強みが発揮されたと考えられる。同時に、アート活動全般が自己表現を伴うものとして一ある程度効果を示している可能性もある。このようなアートジャンルによる効果の違いは今後検討していくべき課題の一つとも言える（関連研究として、中野・岡田[2012]など）。

さらに、参加者とその周囲の特定の人物との関係性が改善されたことを示す発言も複数の参加者から見られた。例えば家族関係に関しては、「（以前は）お父さんと距離を置かっていうか、なかなか話せなかったんですけど、こういう風にお話をすればお父さんは、楽しくお話できるんだって何か見つけて、お父さんとなんか気軽に話せるようになりました」（C①）というような発言があった。こうした変化の背景としては、上述のミュージカル活動そのものに強く結びついた姿勢や自己観の変化だけでなく、本事業の毎回のレッスンにスタッフ・参加者含めて年齢・バックグラウンドともに幅広い層の人々が参加しており、そうした人々とある意味で「異質な」コミュニケーションをとり続けたことが大きく寄与していた可能性がある。こうした場に参与することは参加者からしたら一見難しそうに見えるが（インタビュー内でも事業開始当時の状況についてそのように振り返る発言が見られる）。しかし、初めから異質な他者同士という認識を持った上で、ミュージカルの上演に向けたレッスンの中で意思疎通の手段として会話の仕方を探っていく過程で、結果的に色々な場面で通用するような社会的振る舞いを学ことができたのかもしれない。ひとつの作品を大人数が協同で仕上げるという過程は易しいものではなく、本事業の参加者観ではお互いに良い点や悪い点を指摘し合うという非常に難しいコミュニケーションが要求される場面も生じていた。しかし、むしろそのような状況を乗り越えることで、人との関わり方へ習熟していくような過程がありうる。以下の発言はそれを示す好例の一つと言える。

(自分が失敗した時も)周りのみんなが笑ってくれてるから、大丈夫だって思ったり。褒めてもらったときは、やっぱり自信にもつながって、こう言ったら相手も不快になっちゃうんじゃないかって今まで言えなかった意見が、言えるようになった (C①)

興味・関心の変化 参加者本人がどのような対象に興味や関心を持つようになったかについては、5人全員に共通してミュージカルそのものについての見方やイメージが変わった様子が見られた。特に、本事業に参加する前はさほど知識や関心を持っていなかったミュージカルという表現形式や歌・ダンスなどに普段から強く関心を持つようになり、普段から自宅で歌を歌うようになったり、インターネットなどを通じて積極的に作品に触れる機会を持ったりする参加者も見られた。ミュージカル作品や演者などに対する認識の変化として、「音楽とかを聴いていて、テレビでも、例えば歌手が歌ってるのを聴いていて、あとミュージカルがCMでやってたの見たりとかして、ああ、なんか見方が少し変わるなって」(D①)「あの人たち、やっぱり練習を山ほどして、ああいう域に立っているんだなって感じたっていうのは、楽しいというか、新たな気持ち」(D①)「声を出すっていうのと体を動かすっていうのでいろいろ教えてもらったので、そういうミュージカルとか、歌とか、あと歌い方とか、やり方に注目してみるようになったりとかはしてると思います。そこはちょっと変わってると思うんです。」(B①)などといった「見方の変化」を自覚するような発言が見られたのは興味深い点である。自分自身が創作・表現活動を行うことで他者の作品に対してポジティブな感情とともに受容できるようになるという現象は心理学の先行研究でも指摘されており、こうした芸術表現から鑑賞へと続く過程は個人の人生全体の主観的幸福感 (well-being) に貢献するひとつの経路にもなりうる重要な点である (Matsumoto & Okada, 2019)。一方で、本事業のミュージカルの経験が、他の芸術領域や芸術に限らない様々な領域に積極的に関心を広げていく契機になり得たかどうかについては今回のインタビューの結果からは明確に結論づけることは難しい。この点は心理学の理論としても研究途上の段階にある。なお、本調査内では、就労や教科学習に対する意欲を持つようになったという報告の他、「今度こうやって人前でやることがあるんだったら、ミュージカルもいいですけど、スポーツとかもいいと思います」(D②)というように、「人前でやることの楽しさ」という共通項を介してミュージカルからスポーツという他の領域へと関心が転じている発言例も見られた。このような興味の転移とも呼べるような現象が高い頻度で生じているようであれば芸術文化事業の意義としても重要であろう。今後、このような変化についても詳細な調査・分析が求められる。

ミュージカル活動を通じて、(ミュージカルに関わる事柄だけでなく)外界の様々な事象に対して関心を持つようになったり動機づけが高まったことは本事業を通じた重要な変化だと言える。一方で、1年程度の取り組みではミュージカル以外に具体的に関心を持てる領域などには出会わないケースも実際には少なくない。そのような場合、継続的にプロジェクトを実施することも有効かもしれない。単発のプロジェクトを超えてさらに長期的なスパンでミュージカルという固有の領域に関われる場があることは、「一回の参加では満足いくまでできなかった」「自分が十分な技術段階に至れなかった」などというネガティブな印象を持った参加者がその印象をむしろ今後活かすような形で昇華できる道が用意される。実際、本インタビューでも、最終的な達成水準に関してやや否定的に自己評価しつつも、次回以降への参加への意欲を述べる参加者が見られた。もちろん、参加者に対して技能偏重的な見方を与えるような場にすべきではないことは注意すべきだが、一方で、自発的にその場における活動内容(本事業においてはミュージカルそのもの)に対して自発的に関心を持ち、その領域の技能の習得に強い意欲を持つような参加者も現れうる。そのような関心の持ち方をする参加者には、発展的な活動内容に誘導すること、あるいは、その場に留まって興味を深め続ける選択肢を用意するなどが考えられる。これらの指導は参加者の様子や特性を踏まえて丁寧に検討されるべきである。

研究 2-2：カメラオブスクラ制作ワークショップにおける 遊びと学びの過程に関する観察調査

方法

研究 2-2 では、NPO 法人ザ・ダークルーム・インターナショナル「PHOTO CABIN」における単発のワークショップ実施時に記録した映像に基づき、参加者がワークショップの中で具体的にどのような体験を得ているかについて検討した。対象となるワークショップは 2020 年 12 月 12 日に三井アウトレットパーク横浜ベイサイド・ベイサイドラウンジにて開催され、当日は 5 組 13 名がワークショップに参加した。ワークショップは大きく分けて (1) 事前レクチャー (2) カメラオブスクラ制作 (3) カメラオブスクラ体験の三部構成になっていた。本研究では特に二番目のカメラオブスクラ制作時（参加者の作業開始から終了まで 30 分程度）の参加者の様子を分析対象とした。これは、(1) 事前レクチャーの間は全員が着席して講師の話を聞いており、特段観察できる行動が発生せず、また (3) カメラオブスクラ体験の間はアルミホイルなどを用いてワークショップ実施階乗の部屋全体を一個の「巨大カメラ」に作り替えるという参加者が能動的に関与する作業を明るく見通しの良い環境下で記録できたためである。作業の様子は部屋の二箇所に設置されたビデオカメラで録画された。

分析手法について まず、ワークショップ全体の様子、実際の記録映像からアクセス可能な情報、そして事前に実施団体からヒアリングしていたワークショップ実施の目的などを照らし合わせて検討した結果、参加者の中でも特に児童 4 名に焦点を当て、全体を通じてどのような振る舞いを見せているかについて詳細に検討することにした。具体的には、約 30 分間の作業時間を序盤・中盤・終盤として均等に 3 分割し、各児童がそれぞれどのような活動に従事しているかについて「作業している時間」「遊んでいる時間」「何もしていない時間」の 3 種類のカテゴリーに分類した上で、各カテゴリーの累計時間を算出し、各児童のワークショップ中の振る舞いの全体的な傾向を描出した。

結果と考察

各児童の行動の分類とその考察 各児童（A~D として表示する。児童 D のみ途中から参加のため序盤の全カテゴリー合計時間が短い）の行動を「作業している時間」「遊んでいる時間」「何もしていない時間」の 3 種類に分類し、累計時間を計算したものを Figure 6 に示した（この際、カメラに写っていない時間は集計から除外した）。この図から読み取れるのは、各児童は基本的にはワークショップで講師から指示された作業（暗室を作るために窓に霧吹きを吹きかけアルミホイルを貼る、必要な道具を机に取りに行くなど）に従事しており、途中で無関係なことで遊んだり、何もせず待機したりといった時間は少なかったことである。一方で、作業以外の行動時間には個人差があり、それが終盤に集中して見られるか（児童 B・D）、中盤と終盤の両方に見られるか（児童 C）といった点に違いが観察された。なお、全体として後半で作業以外の時間が増加傾向にあったことは、作業が必要な窓の領域が徐々に消失し作業することがないという状況が生じていたことにも起因していたと考えられる。このように児童によって従事する活動の内容に違いが見られることは、ワークショップが（部屋をアルミホイルで暗室にするという明快な作業の目標を設定しつつも）各参加者にとって行動への制約が比較的小さい場として機能していたことを端的に示していると言える。実際、スタッフなどの大人は時に作業への参加を児童に促しながらも、強制するような場面は一切見られなかった。また児童・大人問わず参加者は立ち作業に疲れたら作業場から離れて着席して休憩することもできた。さらに、児童たちにとっては部屋を暗室にするという「作業」も、窓にアルミホイルを貼るという興味を惹かれる工作遊びの一環として捉えられていた可能性もある。各児童が作業をしていない状態から作業に入るまでの過程を観察すると、全員が誰から促されるわけでもなく自発的に作業を再開している様子が見られた。このことから、各児童にとって「作業」が内的に動機づけられた遊びに近い意味を持っていたと考えられる。すなわち、本ワークショップ内では作業目標への方向づけが強い制約とならず、緩やかに提示されていたことで、逆に各児童が積極的に興味を持って作業に従事するようになったと考えられる。

また、各児童間や児童 - 大人（スタッフや他の参加者）間の関わり合いを観察すると、アルミホイル、霧吹き、脚立（窓の高いところまでアルミホイルを貼るためのもの）などといった道具を介して互いに場における役割を付与し合い、自然にワークショップ全体の場に各児童が自分自身を位置付けることに成功している様子が見られた。例えば、アルミホイルを手にして脚立に登るだけでも、児童は周りの大人から「その窓の上の部分に貼るという役割を持った者」とし

て見なされるという意識を持つことができる。また、アルミホイルを持つ人物の近くで自分が霧吹きを持っているという状況を認識したならば、その児童は「アルミホイルを持っている人を手伝う者」として自分を認めることができる。このように、集団がひとつの場で流動的に役割分担をしながら共通の完成物を目指して作業をするという作業形態が本ワークショップで見られた。そうすることで、児童にとっても負担の無い形で全体の目標に自分自身が寄与しているような感覚を持ちやすい場を提供することができたと考えられる。

「遊び」と「学び」の両立性 本ワークショップが設定していた重要な目標としては、カメラオブスキュラが外の景色を映し出す様子を間近で見ることで、カメラの基本的な原理を体験的に理解するというだけでなく、外の世界そのものに対する見方にも何らかの新鮮な変化が生じるということがあった。実際にどのように参加者の世界の認識の仕方が変化したかということについては研究1や個別指標の分析結果から見える部分の他には、詳細な追跡調査などを実施しないことには結論づけることが難しい。しかし、理論的には本ワークショップにおける「学び」が実際に何らかの形で生じていた可能性は十分支持される。前項でも見た通り、本ワークショップでは、カメラオブスキュラ制作という作業自体が（特に児童にとっては）「遊び」の一種としても捉えられていた可能性がある。そして続く(3)カメラオブスキュラ体験においては、参加者にとっては「自分達自身で作り上げた」ものに他ならないカメラオブスキュラという装置によって外の風景が暗室内のスクリーンに映し出されたという事象は参加者に少なからず感動や驚きをもたらしたと見られる（暗室で景色がスクリーンに映し出された時には参加者たちは歓声を挙げており、これが上記の感情の結果と見られることは論を俟たない）。このようなポジティブな情動体験と学習効率との心理学的な関係性については明確な結論は未だに出ていないものの、遊び行動と学習行動の密接な関係性、あるいは、ゲーミフィケーションの効能を示唆する知見は多い（e.g., Hallifax et al., 2019; Rieber, 2019）。こうした知見を踏まえると、今回のワークショップについても参加者（特に児童）が肯定的な学習経験を得ていた可能性が示唆される。もしも参加者がカメラオブスキュラ制作に携わるプロセスが省かれ、会場に到着したら最初から暗室が用意されており冒頭のレクチャーに続いていきなりカメラオブスキュラの映像を見せられるという内容のワークショップであった場合を仮に想定すると、本ワークショップの利点はより明確になる。もしそのような構成であれば、用意されたカメラオブスキュラは他人事のように関心を持たないものになり、また参加者自身が自分自身で達成したという感覚も得ずに大きな感情の起伏が無いままワークショップを終えるということになっていたかもしれない。元々は普通の部屋だった場所が、自分たちの手で、ある程度理解可能な工作過程で変容していく様子を一部始終経験することは「遊び」としても「学び」としても密度の高いものである。また、簡易的なフォローアップ調査として、一部家庭で自宅の部屋でも同様のカメラオブスキュラ制作を行ってもらい、その制作過程の様子を映像で記録してもらった。その結果、上記の分析結果と同様に「遊び」的側面が機能していると見られる例が多く見られ自宅での個別的な活動の有効性も併せて示された。また、既にワークショップに参加した家庭であっても、普段生活している自宅からの風景がカメラオブスキュラを通じて倒立し違う色合いで見えるという経験では別種の新鮮さを感じられていたように見られる。これらの結果は本ワークショップで用いたカメラオブスキュラという題材が様々な形式へと展開できる可能性を示唆している。

総合考察

研究2-1では参加者が幅広い層の他者との触れ合いを通じてコミュニケーションスキルを獲得する様子が明らかになった。また、それは別の場所や環境に適用されていた。研究2-2の別の事業の参加者においても、けるワークショップ内の道具を介した他者との相互作用が見られ、それが集団内での自然な自己の位置づけに寄与していた。このように、研究2-1, 2-2という全く異なる種類のプロジェクトに関する質的調査を通じて共通して見えてきたこととして、元々プロジェクト計画時に意図された側面で参加者に期待される変化が生じていたというだけでなく、プロジェクトを実施する側が明確に予期していないような場所で参加者が興味深い種々の経験を得ていた可能性が示唆された。特に、参加者同士の相互作用的な過程がアート活動を媒体として創発的に立ち上がることで、他の種類の活動ではなかなか見られないような特有の活動経験が参加者にもたらされていた点は注目すべき結果であると言える。人々の活動の様子は、実際にその実施過程を詳細に分析して始めて具体的に見えてくる一面がある。そのため、研究1のようなあらかじめ固定した項目を用いた量的な分析とともに、その場で起きたことを考察できる研究2のような質的な検討を採用するこ

とは重要である。本研究内で得られた知見は、さらに今後の芸術実践活動や、それに関する量的な指標の再設定もしくはさらなる質的調査に活用されていくことが望ましい。

(文責：東京大学 松本一樹)

引用文献

1. 石本雄真 . (2010). 青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響 . 発達心理学研究 ,21(3), 278-286.
2. 石盛真徳, 岡本卓也, & 加藤潤三 . (2013). コミュニティ意識尺度 (短縮版) の開発 . 実験社会心理学研究 ,53(1), 22-29.
3. 石黒千晶, & 岡田猛 . (2017). 芸術学習と外界や他者による触発——美術専攻・非専攻学生の比較——. 心理学研究 ,88(5), 442-451.
4. 市村美帆 . (2012). 自尊感情の変動性の測定手法に関する検討 . パーソナリティ研究 ,20(3), 204-216.
5. 桜井茂男 . (2000). <原著> ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 . 筑波大学発達臨床心理学研究 , (12), 65-71.
6. 高田由利子, 石黒千晶, & 岡田猛 . (2019). 音大生の演奏における表現の自覚性尺度の作成 . 音楽知覚認知研究 , 25(1), 21-28.
7. 高坂康雅 . (2011). 共同体感覚尺度の作成 . 教育心理学研究 , 59(1), 88-99.
8. 宇恵弘 . (2018). 芸術活動に対する自己効力感測定尺度の作成 . 応用心理学研究 , 44(1), 85-86.
9. 中野優子 & 岡田猛 . (2012). 即興表現を中心としたダンス授業実践とその効果: 大学生の心理的変容に注目して . 舞踊学 , 2012(35), 53-64.
10. Matsumoto, K., & Okada, T. (2019). Viewers recognize the process of creating artworks with admiration: Evidence from experimental manipulation of prior experience. *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts*. Advance online publication.
11. Hallifax, S., Serna, A., Marty, J. C., & Lavoué, E. (2019, September). Adaptive gamification in education: A literature review of current trends and developments. In *European Conference on Technology Enhanced Learning* (pp. 294-307).
12. Rieber, L. P. (1996). Seriously considering play: Designing interactive learning environments based on the blending of microworlds, simulations, and games. *Educational technology research and development*, 44(2), 43-58.

Table1. 芸術文化事業の意義を確認する心理尺度とその因子構造

	因子					
	I	II	III	IV	M	SD
Ⅰ 芸術活動へのモチベーション (α = .86)						
1 もっといろんな表現や作品を見てみたいと思う	0.683	0.171	-0.016	-0.061	3.11	1.19
2 自分で作品を作ったり、表現したりしてみたいと思う	0.791	0.023	0.015	-0.007	2.57	1.11
3 芸術文化に関わる活動にもっと参加したいと思う	0.858	-0.064	0.051	0.038	2.46	1.13
4 美術館や図書館、劇場に行きたくなる	0.663	-0.029	0.015	0.104	2.84	1.22
Ⅱ 自尊感情 (α = .94)						
5 自分の得意なところを見つけている	0.145	0.777	-0.051	-0.063	2.97	1.09
6 自分に対して、前向きな気持ちになる	0.096	0.876	-0.088	-0.011	2.99	1.07
7 私はいろんなことが出来ると思える	0.191	0.746	-0.051	-0.062	2.87	1.14
8 自分の良いところを見つけることができる	0.085	0.837	-0.075	0.069	2.99	1.07
9 自分の存在が認められていると感じる	-0.144	0.846	0.065	0.071	3.03	1.10
10 自分らしく振舞うことができる	-0.106	0.815	0.095	0.062	3.15	1.01
11 ありのままの自分を出すことができる	-0.058	0.612	0.168	0.052	2.99	0.99
Ⅲ 共同体感覚 (α = .89)						
12 人の輪の中に入ることができる	0.016	0.072	0.854	-0.028	3.01	1.09
13 周りの人と関わりをもつことができる	0.063	0.017	0.901	0.009	3.11	1.04
14 自分が社会の一員だと感じることができる	-0.011	0.438	0.448	0.057	3.06	1.00
Ⅳ コミュニティ意識 (α = .92)						
15 自分の住む地域に興味が湧く	-0.088	0.123	-0.033	0.844	2.92	1.11
16 自分の住む地域とのつながりを感じる	-0.052	0.200	-0.048	0.750	2.61	1.05
17 自分の住む地域に誇りや愛着を感じる	-0.040	0.083	0.011	0.788	2.97	1.18
18 魅力的な地域づくりのために自分から積極的に活動したいと思える	0.144	-0.121	0.021	0.841	2.55	1.07
19 地域のみならずと何かをすることで自分の生活が豊かになると思える	0.125	-0.123	0.020	0.850	2.79	1.06
	因子間相関Ⅰ		0.656	0.602	0.538	
	Ⅱ			0.698	0.592	
	Ⅲ				0.364	
	Ⅳ					
	累積寄与率	3.574	5.135	2.031	2.609	

Table2. 横浜市芸術文化財団の芸術文化事業の開催・非開催地の住民の各尺度得点

変数名	非開催地			開催地		Range	t 値	p 値
	N	M	SD	M	SD			
触発	150	3.60	1.22	3.49	1.36	1.00 - 7.00	0.678	0.50
芸術活動へのモチベーション	150	2.89	0.95	2.75	0.98	1.00 - 5.00	1.306	0.19
自尊感情	150	3.03	0.81	3.00	0.92	1.00 - 5.00	0.295	0.77
共同体感覚	150	3.06	0.95	3.06	0.94	1.00 - 5.00	-0.02	0.98
コミュニティ意識	150	2.79	0.89	2.77	0.96	1.00 - 5.00	0.187	0.85

Table 3a. 各事業のプログラム目的と意義が確認された項目

事業名	プログラム名	(1) 触発				(2) 芸術へのモチベーション				(3) 自尊感情			
		M	SE	t	p	M	SE	t	p	M	SE	t	p
NPO 法人ヒューマンフェローシップ	M6 Musical ACT 発表会	4.80	0.12	10.13	0.00	3.77	0.11	8.39	0.00	3.08	0.08	0.80	0.43
STGK Inc.	左近山アトリエ 131110	5.64	0.23	8.94	0.00	4.17	0.18	7.54	0.00	-	-	-	-
	左近山散歩フェスティバル！	5.00	0.09	15.41	0.00	3.79	0.07	14.16	0.00	-	-	-	-
NPO 法人ザ・ダークルーム・インターナショナル	PHOTO CABIN	5.54	0.09	22.86	0.00	4.13	0.08	17.43	0.00	-	-	-	-
YOKOHAMA AIR ACT 実行委員会	YOKOHAMA AIR ACT	4.68	0.15	7.70	0.00	3.78	0.10	9.42	0.00	-	-	-	-
(株)横浜メディアアド	テアトル図書館へようこそ！	5.40	0.09	19.84	0.00	4.27	0.06	25.39	0.00	-	-	-	-

Table 3b. 各事業のプログラム目的と意義が確認された項目

事業名	プログラム名	(4) 共同体感覚				(5) コミュニティ意識			
		M	SE	t	p	M	SE	t	p
NPO 法人ヒューマンフェローシップ	M6 Musical ACT 発表会	3.49	0.08	5.28	0.00	3.35	0.09	6.10	0.00
STGK Inc.	左近山アトリエ 131110	4.23	0.23	5.19	0.00	4.43	0.15	10.63	0.00
	左近山散歩フェスティバル！	3.42	0.08	4.59	0.00	3.77	0.07	13.64	0.00
NPO 法人ザ・ダークルーム・インターナショナル	PHOTO CABIN	3.46	0.09	4.43	0.00	3.60	0.09	8.86	0.00
YOKOHAMA AIR ACT 実行委員会	YOKOHAMA AIR ACT	3.04	0.11	-0.18	0.85	3.83	0.10	10.28	0.00
(株)横浜メディアアド	テアトル図書館へようこそ！	3.47	0.07	5.65	0.00	3.70	0.07	12.37	0.00

Table 4. 各事業のプログラム目的と意義が確認された項目

事業名	プログラム名	参加人数	事業ごとの目的と意義が確認された項目				
			(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
NPO 法人ヒューマンフェローシップ	M6 Musical ACT 発表会	97 名	○	○		○	○
	M6 Musical ACT レッスン	6 名	-	-	-	-	-
STGK Inc.	左近山アトリエ 131110	15 名	○	○	○	○	○
	左近山散歩フェスティバル！	139 名	○	○		○	○
NPO 法人ザ・ダークルーム・インターナショナル	PHOTO CABIN	71 名	○	○		○	○
YOKOHAMA AIR ACT 実行委員会	YOKOHAMA AIR ACT	76 名	○	○			○
(株)横浜メディアアド	テアトル図書館へようこそ！	116 名	○	○	○	○	○

注) 灰色の部分は事業の主催者が事業計画時の目的としていた項目を示す。(1) 触発、(2) 芸術活動へのモチベーション、(3) 自尊感情、(4) 共同体感覚、(5) コミュニティ意識を示す。○はアンケートの結果、各項目に関する意義が確認された項目を示す。

Figure 1. NPO 法人ヒューマンフェローシップの共通指標得点

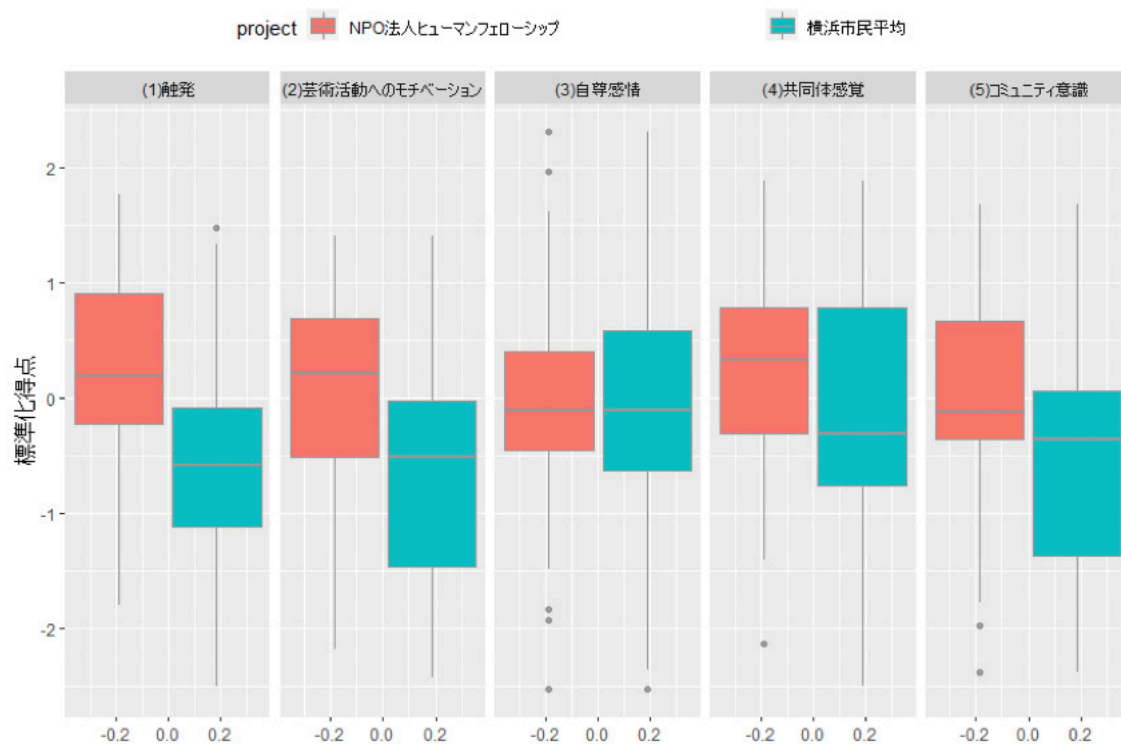


Figure 2a. STGK Inc. (左近山アトリエ 131110・左近山散歩フェスティバル！総合) の共通指標得点

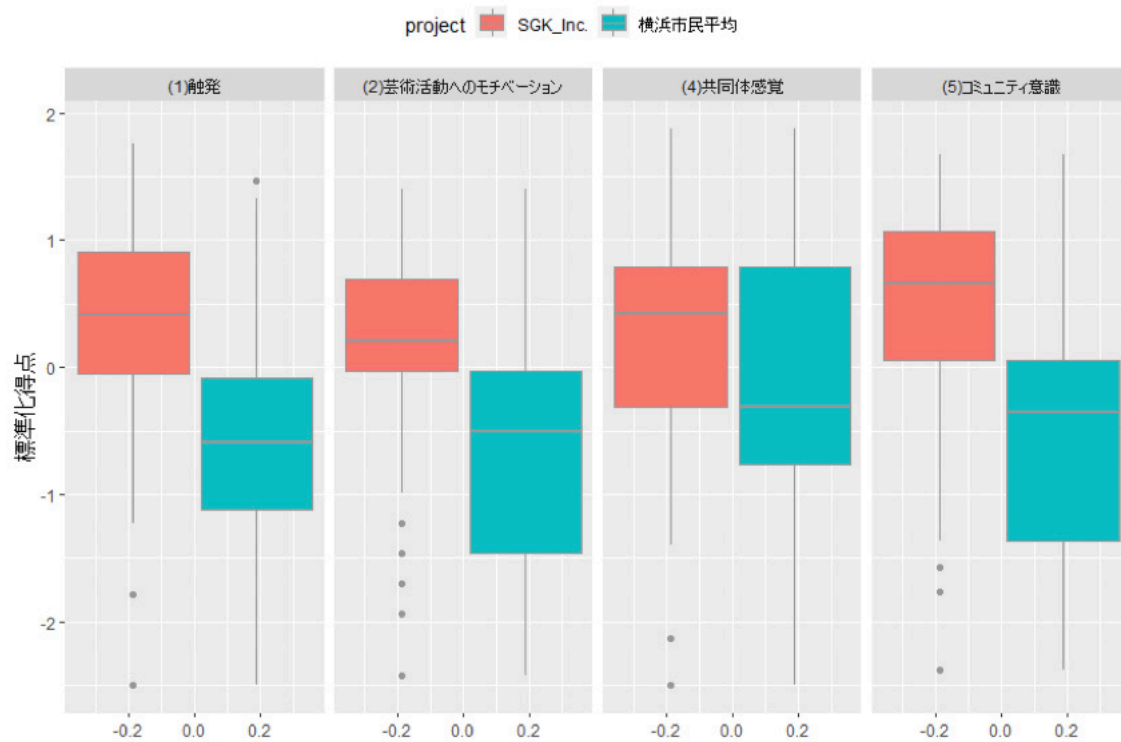


Figure 2b. STGK Inc. (左近山アトリエ 131110・左近山散歩フェスティバル！個別) の共通指標得点

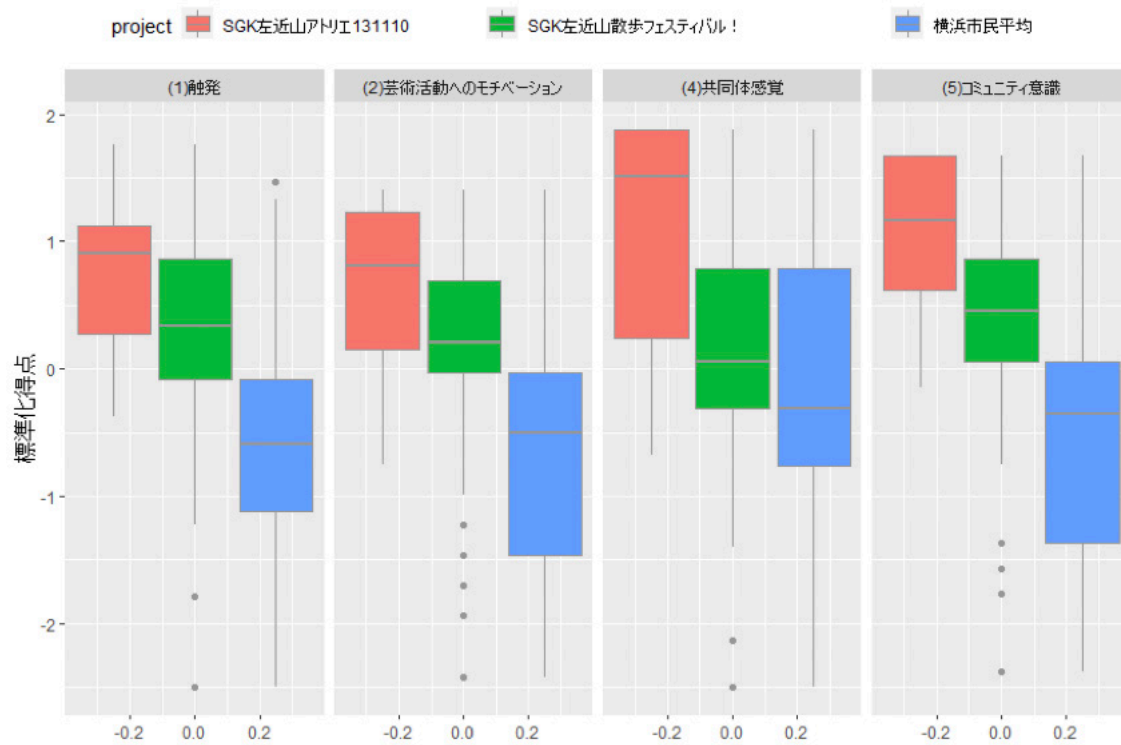


Figure 3. NPO 法人ザ・ダークルーム・インターナショナルの共通指標得点

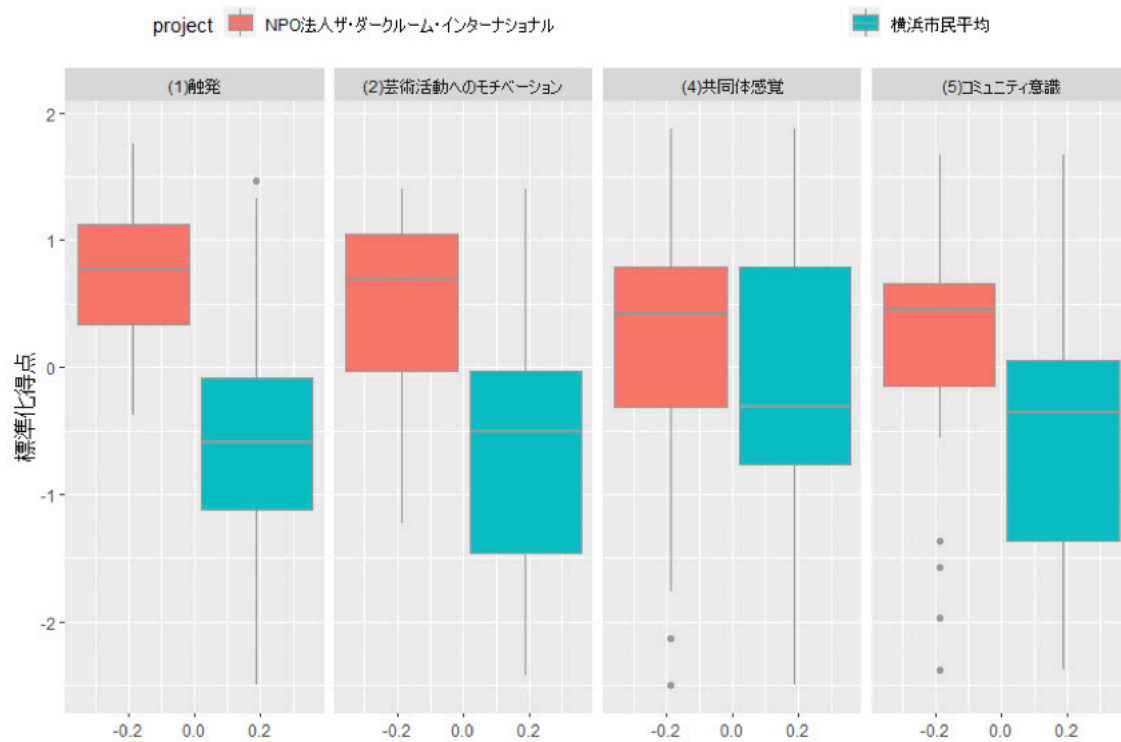


Figure 4. YOKOHAMA AIR ACT 実行委員会の共通指標得点

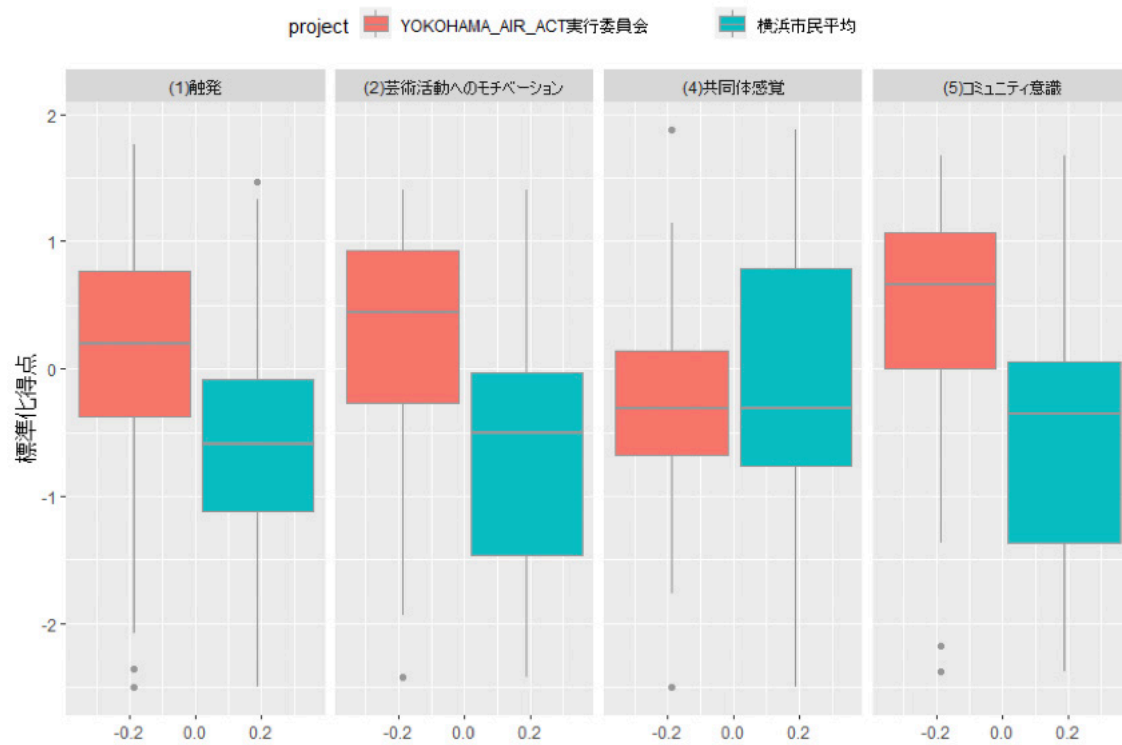


Figure 5. (株)横浜メディアアドの共通指標得点

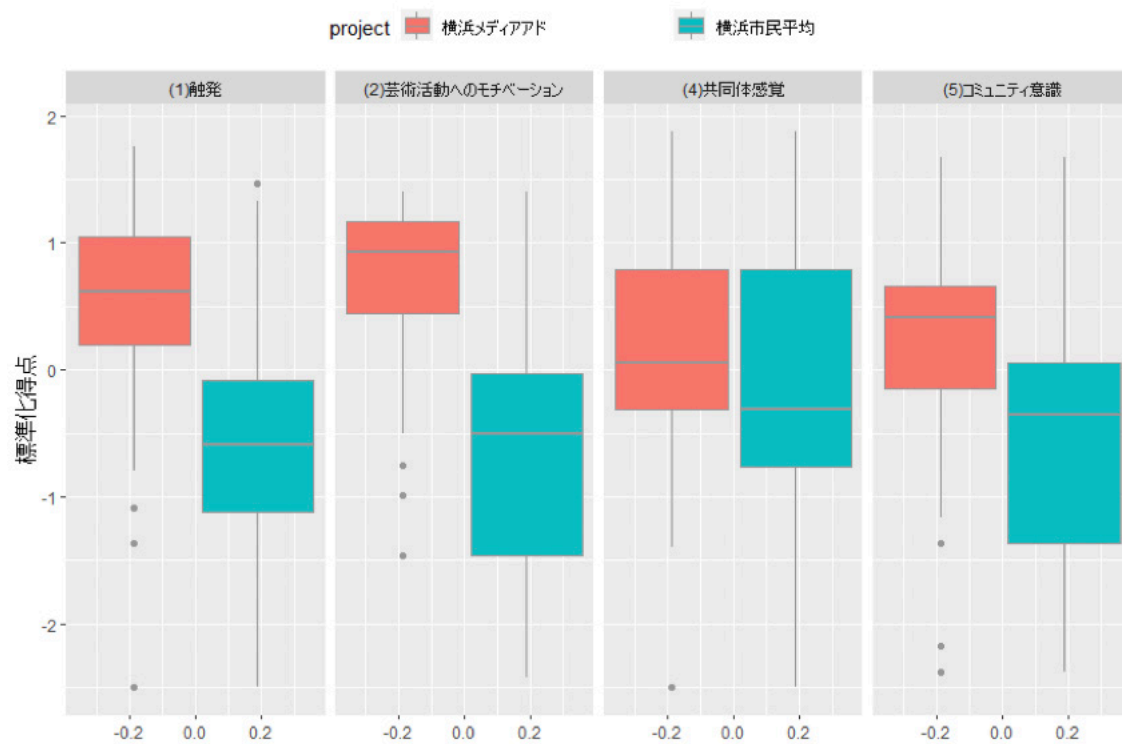
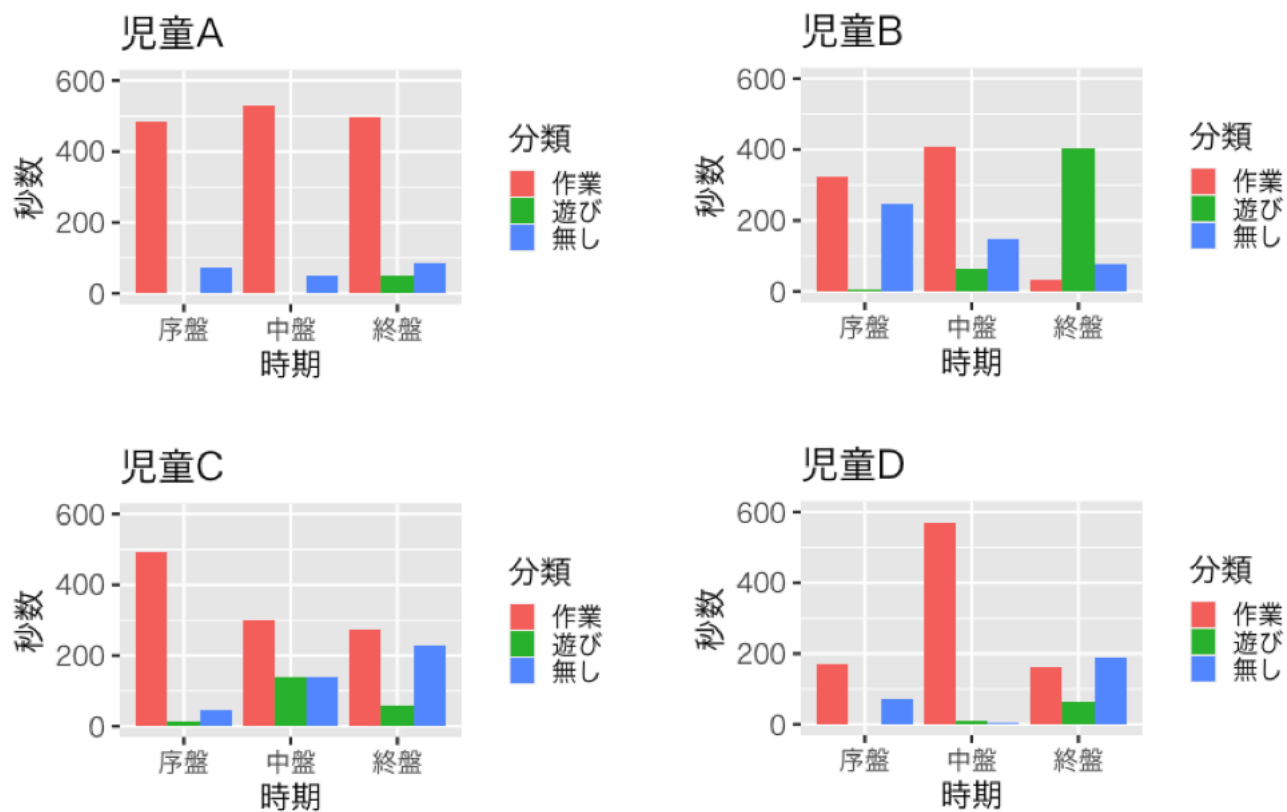


Figure 6. 各児童の作業時間・遊び時間の累計秒数



4章 個別指標について

今年度報告書「第2部 YokohamArtLife の挑戦」参照

個別指標は、YAL において各団体が当該活動の目指すところ（成果）を、自分たちで把握するために可視化 / 言語化し、その活動の達成度合を検討するための評価ツールとして位置付けている。そのため、YAL では、申請段階の中で、申請団体に個別指標を検討して記載してもらっている。ただ、実践してみたところ、あらかじめ団体が使用可能な指標を設定することは難しく、公募段階の想定と申請様式の指標の内容は合致していなかった。そこで、YokohamArtLife では、関係者会議（2019年度モニタリング会議 / 2020 年度 YAL ルーム）を開催することで、各主催団体の個別指標に対する取り組みを進めようと試みた。

1 年目の 2019年度は、YAL 参加団体に「モニタリング会議」の中で、共通指標と共に個別指標の検討に取り組んでもらった。このモニタリング会議は年間で 5 回開催されている。（今年度報告書 48p 参照）

共通アンケートと個別指標の設計にあたって、評価設計アドバイザーをケイスリー株式会社に委託。モニタリング会議ではケイスリー株式会社の落合千華さんにファシリテートしてもらい、各団体が、何を知りたいのかを軸に自由に個別指標のための質問項目を設計した。（質問内容は、昨年度報告書を参照のこと。）調査方法も自由ではあったが、質問紙の形式が一番多かった。また、インタビューに取り組む予定の団体もあったが、YAL は新事業の立ち上げであるため、業務繁多な中で事業遂行を優先しなければならず、指標策定の負荷が大きかったため、断念した。

2 年目の 2020年度は、もっと自由に各団体にそれぞれの活動にあった個別指標を検討してもらうべく、各団体の方での外部評価者の招聘資金も支援するとともに、「YAL ルーム」を 5 回開催した。個別指標の設計にあたり、第一回、第二回の YAL ルームでは岡田猛研究室と、審査員の中村美亜先生にそれぞれレクチャーとブレインストーミングを依頼し、「個別指標」に対する各団体のマインドセットを行ってもらった。（別添 2 資料参照）

結果、各団体は自分たちの事業運営や検証に役に立つような個別指標を設計することを通して、「評価」について深く考えるきっかけとなったようだ。それは、今年度報告書 36p ～ 41p の座談会の内容からも読み取ることができる。

2021年 3 月 19 日（金）に行われた最終報告会において、各団体の発表は年度の活動報告にとどまらず、個別指標の取り組みを通じて得た成果や気づき、今後の取組みについてなどについても報告があった。最初は、わけもわからないまま取り組んだ個別指標だったであろうが、2 年間の個別指標の取り組みを通して（※横浜メディアアドは 1 年間）、それは制度や採択元に対してやらねばならぬ義務から、自分たちの事業を客観的に振り返ったりできるスケールツールや、チーム内での共通言語としてのコミュニケーションツールの役割を帯びてきたように見受けられる。

それぞれの団体内での振り返りを事務局と客観的に共有できるツールとして個別指標を捉え、関係者会議などにおいてこれを議論し、各活動の改善などにつながるものが「小さな評価のサイクル」（第 5 章参照）となる。これを、ドキュメントとしてアーカイブすることで、「大きな評価のサイクル」（第 5 章参照）における評価材料が豊かになり、アーツマネジメントのフローチャートやアーツマネジメント・アセスメント項目（共に第 5 章参照）と併せて、よりプラクティショナルな制度設計に結び付いていくことを期待している。

5章 制度としての「評価」を振り返る

アーツマネジメント・アセスメントの検討

「評価」ということについて、今年度報告書内でも頻繁に議論されているが、2年間にわたる本制度での取り組みにおける、YAL 参加団体と事務局等関係者の関係性を通して見えてきたことは、一般的に使われている「評価」という言葉のイメージと、実際に YAL で取り組んでいる「評価」の在り方に大きな違いがあるということだ。

各団体や、さらには参加者にとっては「評価」というと成績表のようなイメージで、達成度などをシステムの決められてしまうという、トップダウンのイメージであった。今回 YAL で取り組んだ「評価」はそういった一般的な評価ではなく、「アセスメント」という性格が色濃くあると考える。そこで、ここでは今後への提言として、評価を “evaluation” とせず、“assessment” として考察してみる。

アセスメント (assessment) という言葉は、環境等の分野と心理学等の分野とで方法や機能が変わってくるが、主には、客観的に状況を把握、評価し、課題を分析し、解決を目指す態度ことを指すと考えることができよう。

当制度の2年間で取り組んだ「評価」は、その二つの分野のアセスメントを異なるサイクルで回して評価と対話を繰り返す、融合的なものだったと言える。つまり、各団体、事務局等関係者が共通言語として共通アンケート、個別指標 ※1 という形式的なものを使って質的に対話しながら、団体の活動評価と制度評価の二つを同時並行的に進めてきた。では、本制度におけるどの評価が、上記2分野のアセスメントの側面を持つのか。

岡田猛研究室の研究考察（前出、岡田猛研究室報告書 7 p）、「主催者自身が事業の意義に自信を持つことができ、より良いプロジェクトの企画・実施が可能になる。また、事業で狙いとは異なる結果が出た場合に、現場で何が起きていたのかを考える機会になるだろう」、中村美亜先生の「セオリー評価」※2、岡田猛先生が寄稿文内で言及されている DBR (Design Based Research) などから考えて、各団体と事務局との対話※3 が心理分野のアセスメントの側面を。そして、その評価を基に、制度設計を考えるときの評価つまり、横浜市などの行政との対話の中で活用されるのが環境分野のアセスメントの側面を持っていると考えられる。

この二つのアセスメントの手法を、YokohamArtLife では、「小さな評価のサイクル」と「大きな評価サイクル」と呼ぶことにした。（後出、「アーツマネジメント・アセスメントのフローチャート」参照）

単年度の取り組みにおいて、大きな比重を占めるのが各団体と事務局との対話＝小さな評価のサイクルになるが、その制度自体の評価を行政や社会に説明する際に大きな評価のサイクルが必要になってくる。

そこで、大きな評価のサイクルを回すための共通言語として、本報告書では「有用なアーツマネジメント項目」と「アーツマネジメント・アセスメント フローチャート」を考案した。

これは、これまでの事務局が経験的に得てきた項目と、今年度最後に行った、各団体へのマネジメントについてのインタビュー、また、実際の現場視察から得た見識から、参加者の参加度、触発度などが高かった団体の共通するマネジメントの工夫を質的に検討し項目として抽出した。アーツマネジメント項目は、事務局と各団体 / 事務局と行政や社会、その双方との共通言語として有用なコミュニケーションツールになることを想定した。

以上のような考え方を YokohamArtLife の最終報告会で審査員に説明したところ、審査員からか以下のコメントがあった。

「YAL では全体として“評価”という言葉が漠然とした印象であったが、アセスメントという言葉によって時間軸という概念が生じるから、この説明で腑に落ちた。評価に時間軸が加わったことによって、プロジェクトの変化が可視化され、プロジェクトの成長や変化への意識が高まったことは有意義である。行政の芸術活動への評価は、往々にしてイベントに何名入ったというような単発の数値評価になりがちと聞くので、評価に時間軸が加わり、事後評価として継続することの意味が伝わるのではないかと。また、評価を数字などで可視化したことで、ある種の共通言語になり、意見交換できる材料になっていたことは非常に意味があると思った。プロジェクトとは別の時間軸として、地域、街の側の時間軸があるが、その時間はゆっくり流れているので、プロジェクトの時間軸とどのようにすり合っていくのか。完全に一致しないまでも並走しながら、お互いにどのように相乗効果がでるかという評価は、まだこれからだと思う。」

「YAL の活動を積み重ねて、ここまで持ってきたのは制度として評価できる。ただ、環境アセスメントは、そこに取り込む姿勢が硬直化してしまうと返って悪影響ということもある。アセスメントが一つの科学に基づく絶対的評価になると、開発をする側にとっても環境を守る側にとっても、金科玉条のごとく使われてしまうケースがあり、そうすると 0 か 1 かの議論になってしまう。何ためのアセスメントかということを、しっかりと定めておくことが大事で、アセスメントが独り歩き、形骸化してしまうと全く逆の効果になってしまう。この業界は評価にすごくアレルギーがある人も多いので、アセスメントという考え方には可能性を感じる。繰り返しになるが、環境アセスメントのこれまでを見ると、こういったことは最初期の設定の仕方やどうやって始めるかがとても大事になると思う。」

「小さな評価のサイクルと大きな評価のサイクルが連動するという考え方は賛成である。評価というと多くの人は外部から採点されるものというイメージがあるので、この誤解と比較するのであれば assessment はプロセスがあるという点で良いと思う。ただ、“evaluation” とせずに “assessment” としてしまうことは、もう少し議論が必要だ。“evaluation” は、本来的には価値がどうだったかを考えるもので、測定したものの結果を考えて “Value をどうとらえるか” ということが大切だ。YAL の参加団体を見ている、自分たちが何をやっているのか、存在意義は何なのか、という価値を当事者が考えたということに意味があったと思う。芸術文化の価値は言葉では説明しきれないから芸術文化なのだが、できないなりに考えるということが大切だ。アセスメントとして自動化してしまわないで、その言葉にできない部分を考える機会や態度を確保しつつ、アセスメントのサイクルを回すということであれば良いと思う。」

今回 YAL に取り組み、手探りで始めた「評価」であったが、2 年間の取り組みを通じて、制度側にも活動側にも一定の成果を見ることができ、評価の有用性や必要性は明らかになった。ただ、最後のまとめたように「アーツマネジメントの指標」としてしまうと、単なるマニュアルとなってしまったようで、つまらない。振り返るに参加団体と事務局が専門家を交えて、評価を議論していたプロセスが最も創造的であった。

最後に、YAL の制度がここまで短期間で成熟できた理由を付け加えると、一つはあらかじめ期間限定のプロジェクトで出口を見据えて制度や評価を検討したこと、もう一つは常に現場との対話を重視し、漸進性を持って検討したことであった。YAL の取り組みを踏まえて、全国にさらに優れた制度が生まれることを期待している。

〈引用文献〉

※ 1：本報告書内 第 4 章

※ 2：はじめての“社会包摂×文化芸術”ハンドブック 2019 文化庁×九州大学 共同研究チーム

※ 3：昨年度報告書「今回の制度の特徴」(8 p)「チームビルディングとコミュニケーション」(10 p)

〈参考文献〉

福島哲夫 「公認心理師必携テキスト」学研メディカル秀潤社 2018『心理アセスメント（以下、アセスメントと表記する）とは、心理査定ともよばれ、面接や観察により知り得た情報や、心理検査を用いて得ることができた情報から、クライアントの状態や特性を把握し、評価することを指す。(p.296)』

新井雅・庄司一子「心理専門職によるアセスメントのプロセスに関する展望—児童・青年期の臨床事例を中心に」Japanese Journal of Counseling Science 47 11-9(2014)

鈴木克明・根本淳子「(総説) 教育改善と研究実績の両立を目指して：デザイン研究論文を書こう」医療職の能力開発 (JSISH 学会誌) 第 2 号のための原稿 (最終稿 2012.9.11)

片谷教孝「環境アセスメント制度の現状と課題」環境アセスメント学会誌 15 (2) : 39-43 (2017)

浅野直人「環境影響評価法の 20 年を振り返る」環境アセスメント学会誌 15 (2) : 33-38 (2017)

環境省総合環境政策局 環境影響評価課「環境アセスメント制度のあらまし」 2009 年発行

有用なアーツマネジメント項目（仮）

■ 制度設計におけるチェック項目（助成等制度の事務局）

- ☒ 公募において、明確に目的、目標、行動、成果は記載されているか。
- ☒ 提案のあった地域や団体を環境を把握しているか。
- ☒ 決定に向けて合議する組織のジェンダーバランスはあるか。
- ☒ 第三者の審査機関、または設計にあたって第三者の意見を取り入れているか。
- ☒ 公募→採択→中間報告→報告の各プロセスにおいて、申請者との対話の機会はあるか。
- … など

■ プログラム運営におけるチェック項目（主催者）

- ☒ 基本計画において、明確に目的、目標、行動、成果は記載されているか。
- ☒ 基本計画を実施することによる環境の変化を予測できているか。（指標の独創性はあるか。）
- ☒ 計画変更への柔軟性はあるか。
- ☒ プロジェクト全体の方向性を示す“ディレクター”は存在しているか。
- ☒ スタッフや関係者が主体的に取り組める運営があるか。スタッフの意見を反映する仕組みがあるか。
- ☒ 開始前に体験に導入しやすいコミュニケーションがあるか。
- ☒ 終了後に体験を振り返りやすいコミュニケーションがあるか。
- ☒ 一人で参加しても不安なく参加できるプログラムとなっているか。フォローする体制はあるか。
- ☒ アーティストと主催者の協働はあるか。
- ☒ 主催者と地域住民との協働はあるか。
- … など

■ 場・空間におけるチェック項目（主催者）

- ☒ 地域の誰もが訪れやすい場所であるか。（立地／設備／天候対応…）
- ☒ 作品や会場の設えは、アーティスト、参加者やスタッフにとって安心・安全である準備ができているか。
- ☒ 会場内で参加に関する情報が取得できるようになっているか。
- … など

■ アーティスト・作品・活動におけるチェック項目（コンテンツ）

- ☒ ディレクターとアーティストによる趣旨の共有はできているか。
- ☒ 主催者はアーティストに主催者、活動地域や参加者の目的、環境、歴史、現状を説明しているか。
または、アーティスト自身のリサーチ時間を十分に取れているか。
- ☒ アーティストのアイデアをプログラムに積極的に反映するつもりがあるか。
- ☒ アーティストの自主性、自立性を担保できているか。
- ☒ アーティストと地域住民、参加者との対話が生まれやすい工夫はあるか。
- … など

アーツマネジメント・アセスメントのフローチャート（仮）

